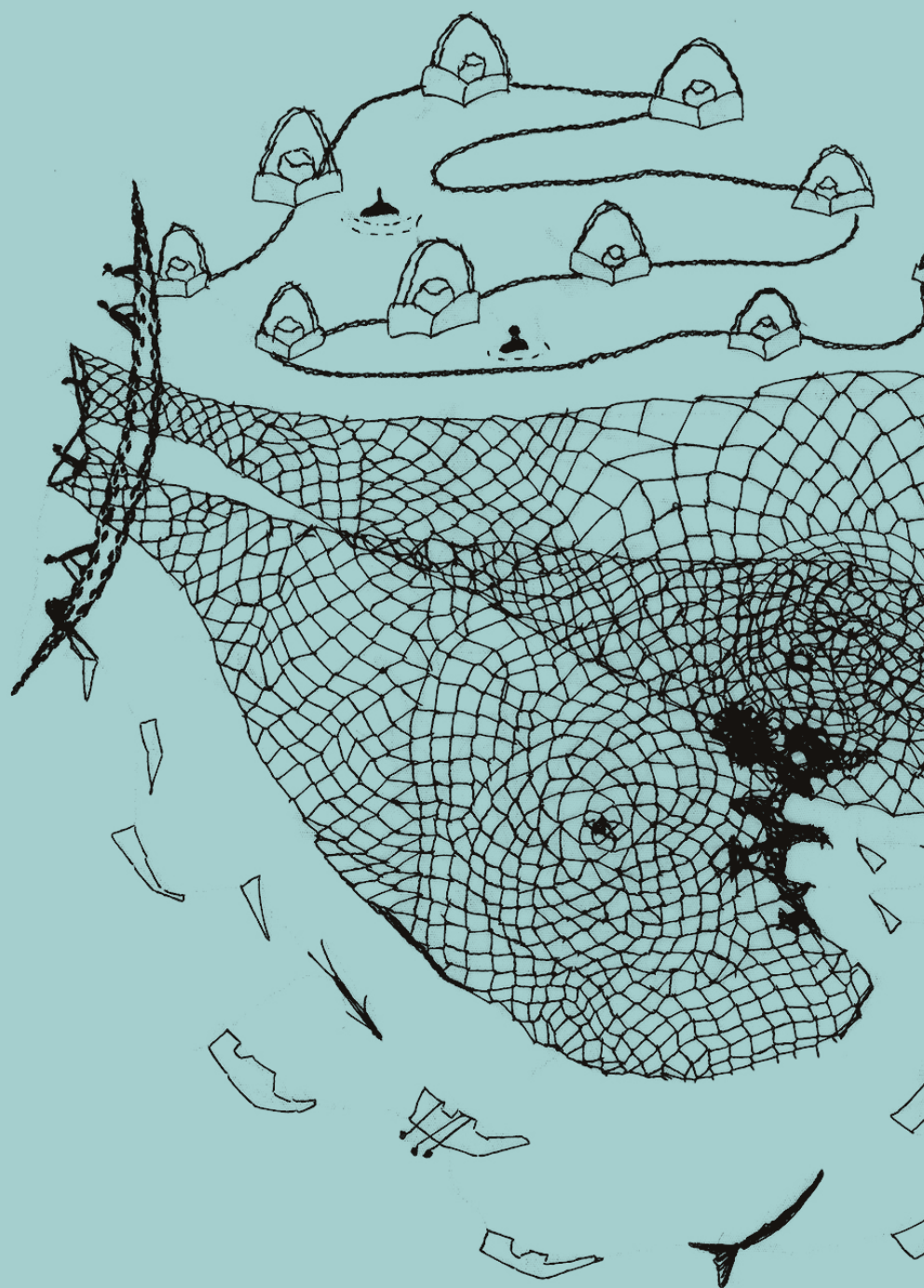


東北の
風景をきく

FIELD RECORDING

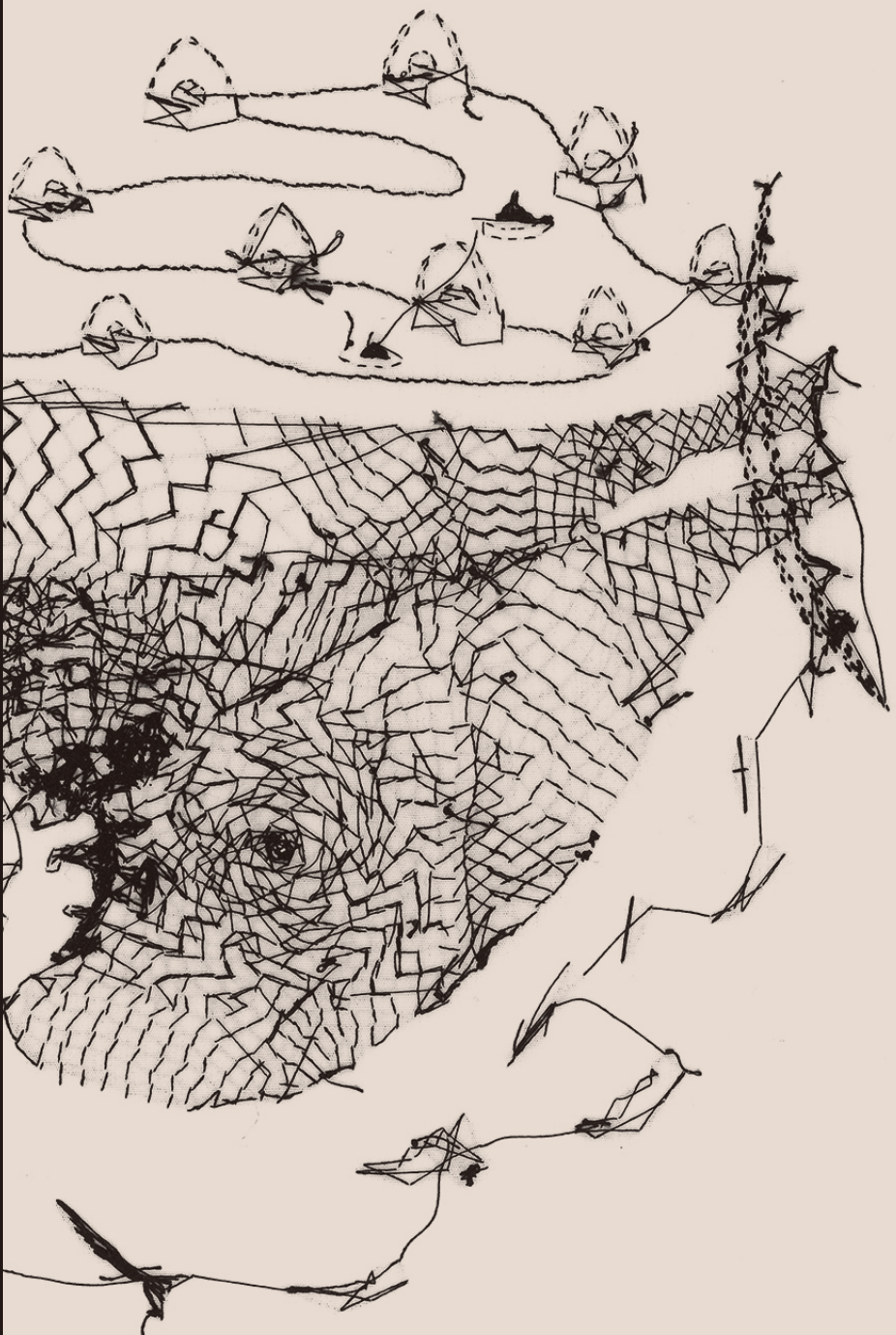
特集 記録の生態系にふれる



vol.

01

ART SUPPORT TOHOKU-TOKYO



東北の
風景をきく

FIELD RECORDING

特集 記録の生態系にふれる

現在の役場庁舎が建つ裏山は「城山」と呼ばれ、まちを一望することができる。写真左、建設中の建物の前にある一段低い、穴のようにくぼんだ場所は、もともとの地面の高さ。写真右、フレームから外れたすぐ横には、小鎌川水門があったが、津波はその約15mの高さを乗り越えた。2017年8月31日〈岩手県大槌町〉
Photo by Emi Nakata





写真左には、吉里吉里海岸に続く橋が壊れたままになっている。写真右には、新しい防潮堤が建設中。中央は旧国道45号線。

2017年8月31日〈岩手県大槌町〉

Photo by Emi Nakata



防潮堤を越えて浜辺に抜けると、震災前
と変わらない、静かな海が広がっている。
2017年8月31日〈岩手県大槌町〉
Photo by Emi Nakata

はじめに

東日本大震災から7年目

沿岸部では大規模な造成工事が進み、徐々に家も建ち始めました。安定していく風景のなかで、震災から3年目と5年目の節目とは違い、静かに潮目が変わりつつあります。震災以前の暮らしに戻ろうとする人。離れることを決める人。震災以降に東北の地に訪れた人々も同様に暮らしのありようを変化させています。

これまでとは違う「日常」に向かう道の途中。いま、東北の地では何が起こっているのだろうか？

特集は「記録の生態系にふれる」

震災から5年が経った頃、東北で暮らす人たちのなかに、記憶と記録にまつわる問題意識の高まりを感じるようになりました。どのように出来事を記録し、伝わるかたちにしていけばいいのだろうか。そうした問いの切実さは、時間の経過とともに強くなっていく。そして生まれた実践の数々は、共通の関心として、日本の「近代」の経験や土地の歴史への関心と結びついていっているように見えます。これらの実践は、これま

でのアートのありようを揺さぶる表現の萌芽のようで、それは東北という場所に群生しつつあるのかもしれない。

そこで今回は、震災を契機として、東北の地で生まれつつある「記録の生態系」を探ることにしました。

東北の風景をきく

2016年はインタビュー集『6年目の風景をきく』とともに歩みを進めてきた方々の声を手がかりに、震災以降をふりかえりました。この7年目に創刊するジャーナル『FIELD RECORDING』は変わりゆく震災後の東北のいまと、その先にふれたいと思います。

人に出会い、声と向き合い、土地の風景と出会い直す。そこから出来事を分かちもつ技術について考えたい。なぜなら、東北で起きていることは、震災の経験に限らない「わたしたち」の「平時」と地続きだから。

まずは、歩いて、その声を記録することからはじめます。

＊『6年目の風景をきく 東北に生きる人々と重ねた月日』はASTTのウェブサイト (asttr.jp) にてPDFダウンロードが可能です (郵送受付も可)。

東北の風景をきく

FIELD RECORDING vol.01

特集 記録の生態系にふれる

10 Interview

甲斐賢治さんにきく

過去を引きずりながら、未来をかき混ぜる

22 Conversation

一枚の写真たち 「復興カメラ」座談会

34 途中の風景 松本篤

38 東北の表現

屋根裏ハイツ「とおくはちかい」／「ラジオ下神白」

42 大風呂敷のこと 中崎透

48 Diary 福島大風呂敷、制作日記2011 中崎透

58 わたしの東北の風景

61 参加者一覧

62 編集後記 佐藤李青

Art Support Tohoku-Tokyo

甲斐賢治さんに きく

「せんだいメディアテーク アーティスト・ディレクター」



過去を 引きずりながら、 未来をかき混ぜる

東北のことを考えると、仙台で活動する「人」や「プロジェクト」がいくつも思い浮かぶ。それらは、せんだいメディアテークがひとつの基点となっているように見えます。震災の記録に向き合いながら、市民とアーティストと一緒に、表現や仕事が生まれる場をつくっており、話題はつきません。震災から7年目、アーティスト・ディレクターを務める甲斐賢治さんはいま何を考えていて、その先に何を見ているのでしょうか？

震災だけを見てしまったら、それは同時に水俣を忘れているっていうことになってしまう。

——いま、どんなことを考えていらっしゃるのか
おきかせいただけますか？

どこから話したらいいのかな。震災以降の状況について話すときに躊躇というか、どこか困惑するのはたぶん、震災のことだけに絡め取られたくないという気持ちがあるようなんです。『せんだいメディアテーク（以下、メディアテーク）*』は、アートセンターとメディアセンター、コミュニケーションセンターなど複数の機能が期待さ

れる、文化振興よりも「学び」にウェイトを置いた仙台市の教育局管轄の生涯学習施設です。僕は教育行政のもとにアートがあることをとても気に入っています。文化振興策のようにジャンルに拘束されたり、公平性の担保を理由にことあるごとに「公募」したり、観光などの経済的指標にもさらされることが比較的少ないように思えるんです。つまり、基本的にはどのようなアートを扱おうが、利用者や鑑賞者に対する「学びのデザイン」が仕事だと思っています。

きき手 佐藤李青、嘉原妙
構成 一川村庸子
写真 鈴木諒一

*1 せんだいメディアテーク
美術や映像文化の活動拠点であると同時に、すべての人々がさまざまなメディアを通じて自由に情報のやりとりを行い、使いこなせるようになることを目指す公共施設。ギャラリーやスタジオ、図書館などの機能を持ち、さまざまなプログラムを行っている。

だから、市民やアーティストも入り交じって復興の過程を記録し、アーカイブしていくという『3がつ11にちをわすれないためにセンター（以下、わすれん）*2』という事業においても、その下地に「メディアブラクティス」という発想があつて、アーティストであれ、一般の市民や学生、退職者であれ、自分から主体的にさまざまなメディアを用いて表現する場として捉えていて、要するに学習の機会なんです。で、極端に言うところ「震災」もそういった活動テーマで、地域文化における数多あるトピックのひとつとも言えないことはない。そういう態度がずっと僕のなかにあつて、震災という出来事だけに焦点を当てて話すのが難しいんじゃないかと思っています。

でも同時に、実際のところは震災、というか津波や原発事故のことを「なきこと」として成り立つものなんてもはや何もないから、メディアテークがいま行っているどの事業にもそのテーマが通底しているようにも思います。そこを突き抜きたい気持ちがありつつ、それ以上にずっと引きず

りたい気持ちもあります。言い換えると、震災だけを見てしまったら、それは同時に水俣を忘れていくっていうことになってしまう。沖縄の米軍基地問題も、広島・長崎のこともある。原発はそれくらい長いスパンの出来事なので、そういう意味ではそれらを全部見渡していかなくちやならない時代だったということに、ようやく気がついたんだと思います。

——そもそも甲斐さんが、2010年にメディアテークにやってきたのはなぜですか？

僕に声がかかったのは、大阪市や府の文化行政で企画やマネジメントに携わっていたことと、『remo「NPO法人記録と表現とメディアのための組織」*3』や『recep「NPO法人地域文化に関する情報とプロジェクト」*4』という市民活動をしていたからだと思います。とにかく自分たちを取り巻く文化的な環境が芳しくない

*2 3がつ11にちをわすれないためにセンター

東日本大震災に対して、ともに向き合い考え、復興への長い道のりを歩きたすために2011年5月3日に開設。市民、専門家、スタッフが協働し、復旧・復興のプロセスを独自に発信、記録していくプラットフォーム。

*3 remo

「NPO法人記録と表現とメディアのための組織」

2002年に大阪で発足し、メディアを通して「知る」「表現する」「話し合う」の3つの視点で活動。文房具としての映像の普及、小さな記録や表現の群れが持つ公共性、映像を媒介とした場づくり目指し、さまざまな研究と実践の循環が行われている。

*4 recep

「NPO法人地域文化に関する情報とプロジェクト」

「文化の地産地消」を目指して2004年に大阪で発足。文化事業の企画・運営、メディア制作、文化事業やアートプロジェクトの調査・研究、文化施設の管理という4つの柱で多様な活動を行っている。

と思っていたので、何でも自分たちでやれる範囲でやればいいじゃないかというDIY的な考え方を仕事に持ち込んで、文化情報のフリーペーパーを編集・デザインし、自分らで撮った地域文化の映像で地元ケーブルTVの番組をつくり、美術館と組んで映像の展覧会を開くなど、手当たり次第に活動していたんです。

一般的に、アートを扱う文化施設の専門性を担保するのは学芸員資格者です。ただ、美術史や芸術学が専門であつて、その多くは市民活動の経験があまりありません。なので、そのようなアートやメディアにまつわる一定の知見や専門性と、いわゆる組織化されきれない市民活動の、わいわいがやがや、ぐちゃぐちゃした力オスのなかを泳ぐ身体を持つ、両生類のような経験を持つ人材が必要だったのでしょう。

で、実際メディアテークに来たら、日本の、あるいは仙台の文化状況のなかで、施設にせよ市民活動にせよ、みんな突き抜けようとしているところ

一定の機会や空間を見出し、組んずほぐれつつ一緒に仕事をしようと奮闘しているのが現状です。わすれん！や『てつがくカフェ*5』で震災に留まり、さらに『せんだい・アート・ノード・プロジェクト（以下、アートノード）*6』でメディアテークの外に出て新たなアーティストを巻き込み復興過程などへの関わりを求めたり、地域の文化活動や、民話や近代のまち並みを記録するようなアーカイブ活動も、どれもそういう現場のひとつなのです。

そういったなかでいつも思い出すのは、震災直後、普段なら躊躇して言えないのに、道ばたでうずくまっている人に「大丈夫ですか？」とたやすく声をかけることができたあの夜の寛容な感じ。です。信号が動いていなくても車と歩行者が互いにケアし合つて交差点を渡るような状況。いわゆる「災害ユートピア」をどっぷり経験していました。ところが2週間もしないうちに、シューツと消滅してしまつた。

で、その後、どうしたらあのとときのそれぞれの

*5 てつがくカフェ

わたしたちが日頃当たり前だと思っている事柄からいったん身を引き離し、「そもそもそれって何なのか」といった問いを投げかけゆつくりお茶を飲みながら対話を行う場。せんだいメディアテークの「考えるテーブル」事業のひとつとして震災2カ月後に始まった。

*6 せんだい・アート・ノード・プロジェクト

「優れたアーティストのユニークな視点と仕事」と地域の「人材・資源、課題」をつなぐアートプロジェクト。2016年に発足し、せんだいメディアテークが運営。アーティストが東北をリサーチし、同時代性のある作品を制作。調査・企画・制作・発表までの過程を人々と共有し、鑑賞に留まらない活動への接点をつくることで「アートの現場」をつくることを目指す。

持つわずかな「自治する力」を維持しながらこの先へと進んでいくことができるかが、僕らの課題なんじゃないかと考えているんです。お客さん意識がクレマーを生み、行政も市場もどんどん

それに対応するコストもストレスも増えていく状況で、どのように「お客さんではない人たち」と出会うことができるのか。それは、どこか「新しさ」を持つ文化を、切実に必要とする地域の人たちと協働してつくることが肝なんじゃないかと思うんです。そのとき「新しさ」を考えていくために、アーカイブという取り組みを通じて、過去をふりかえりながら前へと進んでいくのがそ

の土地の固有性を考える上でも大切なんです。これも、わすれん！をはじめてあらためてしっかりと気づかされたことでした。

正直なところ、津波にせよ原発事故にせよ、これまで僕らは過去をきちんと顧みてこなかった。それに、歴史の教科書で学んだことの延長に自分がいる、などという自覚をみんな持つことができているとは、どうも僕には思えない。

なので、いま僕は「歴史」という言葉を使わず、「昔のこと」と置き換えるようにしています。「歴史」という言葉を使った時点で既に何かが危うくなって、自分たちの現在と地続きではなくなるよ

それぞれが「昔のこと」をふりかえりながらも前へと進んでいく、各自勝手に地域固有の新しい文化づくりに邁進すべきだと思っていますわけです。

うに思える。何がそうさせているのかはわからないけれど、どこかしら「前だけ見ろ、うしろを見るな」と耳元で囁かれているような気さえして、挙げ句の果てには「未来」という言葉もできただけ使いたくない気分になりつつあります。

とにかく、そういったなかあらためて、それぞれが「昔のこと」をふりかえりながらも前へと進んでいく、各自勝手に地域固有の新しい文化づくりに邁進すべきだと思っているわけです。もしかして僕の考え方だと、アートも大事だけれど、自分たちの自治する力をつけるためにアートを必要としていると言ったほうがいいのかもかもしれませんね。

——そうした自治する力をつけるにあたって考えているのは、どんなことですか？

そうですね、僕の立場だと「協働」のかたちをどう探るかだと思っています。僕は「NPOである」というのは、「清き一票」で自分たちの環境

を能力のある誰かに委ね、変えようとするのとは

また別の手段だと思っています。自ら仲間を集め、NPO法人という社会的な人格を確保し、積極的に政策を理解することに努め、公金による公益事業を通じて、たとえ小規模であっても経済活動をしながらか自らが属する環境を、地域社会を変えていく。それは「直接的な政治活動」だと考えてきました。

ところが、結局のところ国の制度としても、そういうった非営利活動に対して寄付税制などの優遇措置は非常に消極的で、制度的にまったく整っていない。1998年に特定非営利活動促進法が施行されてからまもなく20年になりますが、特にアートの現場は厳しい状況のままのように思います。

さらに最も危ういのは、各地のアートプロジェクトや芸術祭において、NPOなどの非営利活動が少なからず与_くしたようにも思えるのですが、ほとんどどこにも記述されず、さほど語られないままに時間が過ぎようとしていることかもしれない

せん。言い換えると、それ以前にはまったく制度化されなかったオルタナティブな活動が法律に基づいた人格を持ち、質の程度に差はあれ、各地の状況を底支えしてきたことがきちんと残されていないということですね。これは、NPO側にもおおいに問題があると思いますが、同時に、批評が作品や作家の評価のみに目を向け、文化的な生態系や環境の整備という、より現実的な課題にコミットしてこなかったことが理由なのではないかとも思います。

とはいえ、政策を通して、さまざまな組織と仕事をともにしながら、環境づくりをしていくことが大切であることは変わりありません。たとえ小さくとも地域経済を踏まえた仕事なくしては継続していかないでしょう。

都市論の第一人者ジェイン・ジェイコブズの『市場の倫理 統治の倫理』という僕にとってバイブルのひとつがあるのですが、そこには倫理にはふたつあると書かれています。簡単にいうと、アメリカの本だからだけど、まちなかで人に会って

「ハイ」って挨拶したら、「ハイ」って答えるのが市場の倫理。ところがガードマンに「ハイ」って言っても返事は返ってこない。でもそれはそれで管理する立場の仕事のふるまいとして正しいと言いうことは理解できる。つまり、市場と統治、相反するふたつの倫理があると。なるほど、それを行き来することが僕らのような者の仕事なんだなと。そりゃ立場が違えばそうなりますよね。多くの人がそうであるように、人は仕事を通じて、さまざまに経験し、学びます。そのとき一定の「公共性」を学ぶことができる機会を施策のなかでつくっていききたい。それが地域の自治する力を育むのではないかと思うんです。要は、社会起業家もそうだけど、社会に良いと思うことを仕事化して、生計を立てる。そういう考え方でいいと思う。だから、地域での文化的な生態系を醸成するような施策にとっても関心があります。

そう考えると、公共事業としてアートは最適なんです。そもそもアートの社会的価値は理解も評価もされにくい。だからこそ、関わる人たちに



はそれぞれの現場において、公金を用いる根拠を説明する責任が発生する。そこに、「公共性」を市民自らが高めていく機会が散りばめられているように思います。もちろん、アートが本来持っている驚きというか、社会システムへのカウンター的な機能をしつかりと社会に対峙させ、適応させていくようなことではないと、そんなふたつの倫理に挟まれることなんてないでしょうけど。

欧州諸国のように民間から始まったアートにまつわる諸活動や機関に、運営費も含めて助成するような施策の進め方が、一定のダイナミズムを生む方法なのではないかと思うんですね。以前、オランダのアートセンターが予算カットの決定を受け、抗議のデモが起きました。確か市庁舎をゴールにまちなかを練り歩いたのですが、そのデモ参加者の多くが施設利用者で、その先頭には施設のディレクターが立っていた。行政指導ではない、本来こういうありようが文化にとっては相応しいような気がするんです。

僕自身の出自としても、大阪市が進めた文化

政策のひとつで大阪西成にあった屋内型遊園地『フェスティバルゲート*7』を拠点とする「新世界アーツパーク事業」なくしては得られなかった経験がたくさんあります。

この事業自体は当初10年の計画において、5年で頓挫しましたが、企画立案、運営にまつわる諸権限を民間のアートNPOにかなりの割合で委譲するカタチで進められました。結果、大阪西成の上田假奈代さんのコールドーム（こえとことばとこころの部屋）*8や雨森信さんのBreaker Project*9、神戸の大谷煥さん率いるDANCE BOX*10や、さらに、アーティストならば梅田哲也*11さんやcontact Gonzoo*12、ほか日本中を動き回っているアサダワタル*13さんや、現在関西の重要な場に必ずいると言ってもいい音響・音楽家の西川文章*14さん、さらには、その後、此花や北加賀屋地区などへも動きが飛び火するなど一定以上の人材を生み、いまでもそれは続いています。

当時僕は、フェスティバルゲートの入居団体の

いますぐ成果に結びつかなくても、とにかく小石を積んでいかなないと道が拓かれない。一つひとつは80点取る場合もあるし、30点の場合もある。

ひとつであったremoに関わりながら、この事業全体を受け持つ事務局にも籍を置いており、事業として撤退する顛末とともに、課題、成果、費用対効果など、その仕組みの可能性と限界をそれなりに把握しています。いまふりかえっても、とても実験的ながらも有効な事業だったと思いますね。

——なるほど、大阪での経験がいまの活動につながっているんですね。

日頃、活動をするなかで、大事にしていることは何ですか？

*7 フェスティバルゲート
浪速区にあった都市型遊園地を含む商業施設。その空き店舗スペースを指定管理者ではなく、大阪市芸術文化アクションプランの一環として、家賃と水光熱費を行政が持ち、NPOが自主的に事業を展開する公設民営方式をとった（新世界アーツパーク事業）。2002年から10年計画の構想だったが、途中で市の文化政策が変更され、2007年に建物が開鎖、remo、DANCE BOX、コールドームなどのNPOが参加していた。

*8 コールドーム（こえとことばとこころの部屋）
2003年、大阪の新世界で喫茶店のふりからはじまった「表現とてあの場」。2008年、西成・金ヶ崎に拠点を移し、「釜ヶ崎芸術大学」や「まちかど保健室」などをひらき、ゲストハウスを運営。「生きていることは表現」と捉え、さまざまな人たちが出会い、悩みも喧嘩も笑いもありのままに「日々人生劇場」が練り広げられている。

*9 Breaker Project
2003年より大阪市の文化事業としてスタート。芸術と社会をつないでいくことを目的とし、表現者と鑑賞者双方にとって有効な創造活動の現場をまちの中に開拓していく地域

密着型アートプロジェクト。芸術表現活動を生活に取り戻すことで、芸術・文化の裾野の拡大を図ると同時に、市民一人ひとりが多様な価値観を獲得し、それぞれの想像力、創造力を育み、成熟した市民社会が形成されていくことを目指している。

*10 DANCE BOX
ダンスの「自己表現の力」「ミニニケーションを創る力」「国際性」を現代社会に活かし、市民がより豊かな生活を享受できる環境づくりを目指す。舞台芸術を「つくる」「上演する」「出会う」何かが始まる「現場」がいつも興っているような状況になるよう、劇場運営やレジデンスプログラムも行っている。

*11 梅田哲也
1980年熊本生まれ、大阪在住。時間と空間を基調とし、建築構造や人々のふるまいを含む状況そのものを素材とした体験型のインスタレーションを展開。日用品や廃材など身近なものを素材に使いながら、都市空間や自然のなかでサイトスペシフィックな作品も手掛ける。国内外の展覧会や芸術祭、パフォーマンス・アーツや音楽のフェスティバル、ライブなどさまざまな場で活動している。

の場合もある。それでも前を向く。そんな感じで
す。

アートにまつわるあれこれをいろいろ疑いま
くって、一周して自分で自分の考えてることをも
また疑ってるので、もう何が本当かわからない。
でも、とりあえずこれかなって思ったことを小石
を積むようにしかできないなと思うんです。

そう言いながらも、アートノードを始めて約1
年半ですが、仙台市のさまざまな施策にアーティ
ストをマッチングする方法が自然と発生してき
ました。

パリ在住のアーティスト・川俣正^{*15}さんとは沿

市民自らが状況づくりに参加し、価値を判断し、
公共と民間が双方に一歩踏み出してつくり出す、
少し危ういかも知れない「公共圏」を
一時的でもいいから確保していく。

に仙台で行われた児童文化運動の掘り起こしに
取り組んでいます。これも仙台文学館など、さま
ざまな公共施設や施策との接点を持ちます。
こうして市の政策や課題に少し介入して、アー
ティストと各部局を行き来するように動くこと
で、アートの取り組みが、内部の縦割りへの「少
しやっかいな横串」になることに可能性を見い出
しつつあります。

市民自らが状況づくりに参加し、価値を判断し、
公共と民間が双方に一歩踏み出してつくり出す、
少し危ういかも知れない「公共圏」を一時的でも
いいから確保していく。そして、アートあるいは
アーティストが持つ、固まってしまった既存の考
えや関係をほぐすような、異物としてのふるまい
を最大限活かした学びの機会をつくりたい。そん
な思いがいくつも重なって、いま、アートノード
を中心にさまざまな事業を展開しています。

もしかすると、メディアアークは、まちの品格
をあらわすようなシンボルを目指すのではなく、
固有の視点や技術を持って内外からやってくる

岸部の被災地域に横たわる貞山運河^{ていざん}で、地域の
人々の要望で、津波で流された橋を再建する事業
に取り組んでいます。あいにく「橋」という公共
財は河川法などさまざまな規制が多く一筋縄に
は行かず、建設には数年という時間を要しますが、
担当部局との連動で実現に向かう道筋がようや
く立ちました。また、環境局には家庭ゴミのなか
にあるリサイクル資源の割合を減らしたいとい
う課題があり、アーティストの藤浩志^{*16}さんとの
事業もはじまっています。さらに、アーティスト
ユニットのKOSUGE^{こうすげ}11¹⁶^{*17}を軸に、タノタ
イガ^{*18}さんなどの力も借りて、大正から昭和初期

アーティストと地域のパートナーとともに、公金
というガソリンをエンジンに流し込み、過去を引
きずりながらまちを疾走し、あたりを巻き込んで
明日をかき混ぜる、攪拌機^{かくはん}のようにありたいのか
もしれません。

と、そんなことを夢想するなか、もはやお手本
はどこにもないようにも思うのです。

2017年9月27日
ROOM302 (3331 Arts Chiyoda)にて

甲斐賢治 |
せんだいメディアアーク
アーティスティック・ディレクター
1963年大阪生まれ。remo [NPO法人記
録と表現とメディアのための組織]とrecip
[NPO法人地域文化に関する情報とプロジェ
クト]、NPO法人アートNPOリンク、NPO
法人芸術生活研究所hanareなどに参加し、社
会活動としてのアートに取り組む。2010年
より、せんだいメディアアーク所属。平成23
年度芸術選奨文部科学大臣新人賞受賞。

^{*12} contact Gonzō
2006年にダンスの塚原悠也と
垣尾優により結成。集団名であり、
彼らの追求する方法論の名称。肉体
の衝突を起点とした独自の方法論を
構築し、即興的なパフォーマンスや
映像、写真作品を制作している。セ
ゾン文化財助成対象アーティスト。
トヨタコレオグラフィアーワード
2014ファイナリスト(塚原悠也)。

^{*13} アサダワタル
P.61参照

^{*14} 西川文章
1975年生まれ。音楽家、サウンド
エンジニア。1996年より音楽活
動を本格的に開始。2004年より
維新派の音楽監督等で知られてい
る内橋和久を中心としたメンバー
等と共に、オルタナティブベース
「BRIDGE」を運営し、音響を担
当(2008年)。専門学校ESP
エンターテイメント音響講師。

^{*15} 川俣正
1953年北海道生まれ。パリ国立高
等芸術学院教授。建築や都市計画、歴
史学や社会学、日常のコミュニケー
ション、あるいは医療にまで及ぶ分野
と関わり、既存の美術表現の枠組みを
超えていく試みを実践している。

^{*16} 藤浩志
1960年鹿児島生まれ。木造家屋
の廃材から101匹のヤセ犬をつく
る「ヤセ犬の散歩」、いらなくなった
おもちゃで子どもの遊び場をつくる
「かえっこ」、かえっこを使った防災
プログラム「イザ!カエルキャラバ
ン!」など不要となった素材を活用
して地域に新しい活動をつくり出す
美術作家。秋田公立美術大学大学院
教授・副学長、NPO法人プラスア
ーツ副理事長、株式会社藤スタジオ代
表。

^{*17} KOSUGE 11¹⁶
2001年、車田智志^{なり}乃(くるまだ・
ちしの、土谷享(たかし)によるアー
ティストユニットとして活動開始。
日常のありふれた環境や、現象、人
のつながりをきっかけに制作。作品を
介在させることで鑑賞者を参加者と
して変質させ、参加者同士、あるいは
作品と参加者のあいだに「もちつも
たれつ」という関係性を構築する。

^{*18} タノタイガ
東京生まれ、仙台育ち。美術家。立体
造形、映像、パフォーマンスなど多
様な表現手法によって、社会制度や
ルールや法律などの記号性と媒体
性を誇張した風刺的表現を行う。と
きには作者自身を媒体とすること
もある。

2018年3月11日に向けて
——復興カメラはこうやってはじ
まったのですか？
川原 もともとわたしたちは商店
街活性化を目的にまちづくりをし
ていたNPOですが、震災後は緊
急支援物資の輸送など復興支援活
動をする事になったんです。そ

こで2011年7月に神戸がどう
やって復興したかを勉強しに行き
ました。そのとき『人と防災未来セ
ンター』で写真の展示や資料を見
て、「これをあとからやろうと思っ
てもできないよ」とアドバイスを
もらって、よし、いまの状況を残そ
うと思い立ちました。そして帰っ
てから、どうしようかと考えてい
たときに、同じ商店街の写真屋の菊

池賢一さんが写真で記録をするの
はどうかと提案してくれたんです。
最初は11人ではじめて、だんだん
「瓦礫でパネルをつくって写真展を
してもいいかもしれない」とか「復
興カメラって名前はどうかあ？」
という感じで、活動が生まれていき
ました。
一兜 そうそう、賢さんが名づけた
「復興カメラ」っていう名前もよ



＊ 復興カメラ
@リアスNPOサポートセンターのスタッフ
を中心に、震災以降の写真（動画も有）を
記録に残す活動。記録は、ホームページや
Facebookで公開している。写真をパネル
にし、各地で写真展も開催。パネルの数は
657点、写真展の開催数は22回、来場者数
は24,320名に及ぶ（2017年9月現在）。
<http://kickoff-rias.com/fukkocamera>



一枚の写真たち

「復興カメラ」座談会

東日本大震災の被災と復興の経験を伝える『復興カメラ*』。岩手県
釜石市と大槌町を中心に、日々刻々と変化し続けるまちの様子や、
地域行事、人々の暮らしぶりなどを「今日のこの景色は今日しか見
ることができない」と写真に撮り続けています。今回、特定非営利
活動法人@リアスNPOサポートセンター（以下、リアス）の川原康信さん
（写真左）と一兜育恵さん（写真中央）、常陸奈緒子さん（写真右）に、記録を続
けてきたいまの気持ちを伺いました。震災7年目、撮影した枚数は
155,182枚に及びます。



きき手 | 佐藤李青、嘉原妙
構成 | 川村庸子
写真 | 仲田絵美



かったから、すぐ「おお」ってなったんだよね。20代前半の若い子たちのチームで、彼女たちからすれば遊ぶところもなくなっていて、楽しみもなくなっちゃったしちょうどよかった。賢さんは「いつもカメラを背負って歩きなさい」「撮りたいと思ったらすぐ撮ってね」って言うてましたね。最初の頃はイベントとか、何かある度に撮りに行ってただけど、だんだんスタッフもNPOを卒業して人が少なくなってきた、

いまは気が向いたら撮影に行っています。
川原 一時期、造成工事で風景に大きな変化がなくて、あまり撮らなかつた時期がありました。最近また急激に変わりました。撮る時期と撮らない時期がありますね。
一兜 途中途中でどうしていったらいいかって話し合ってきてるんです。テーマを決めてやったときもあった。でも悩みながらもよくここまで続いたなって。

まだ何が終わりを全然考えられていないけど、ちよつとそろそろどつかで一回区切りをつけたい感じがありますね。

川原 ほんとよくやってるよね。ただ、まだ何が終わりを全然考えられていないけど、ちよつとそろそろどつかで一回区切りをつけたい感じがありますね。復興どうこうじゃなくて、こつち側だけの区切りとして、それで辞めてもいいし、また新しく進んでもいい。
一兜 うん、区切りっていうか、何だろうね。これからどうやっていいいいのか考えたいというか。いろんなことがいっぱいありすぎて、これでよかったのかどうかいままだ迷っているんです。
常陸 震災から5年目のときに、写真集にまとめようとはしたんですよ。でも、いろいろな兼ね合いがあつて、販売が難しくして止まっちゃって…。

一兜 そう、写真集にまとめられたらいいよねという話はよく出るんだよね。釜石や大槌で写真展をやるのは、地元の人々の気持ちもあるからちよつと難しく、そのぶん写真集っていうかたちで伝えられるんじゃないかと思つて。

川原 地元でも何度か写真展はやつてみたんだけど、2012年のお盆に初めてやったときはすごく怖くて、やっぱり何か言われるんじゃないかと思つていたら、地元のおじいさんたちが孫みたいな子を連れて来て、一生懸命説明してるんですよ。そのときは、ああ、何か役に立ってるんだなって思つたけど、見たくもないってビュッて出て行ってしまう人もいるので、どつちもどつちかな。

一兜 そんなこともあつたね。東京から帰省してた老夫婦が、「もしかしたらこれが家の最後だからこの一枚だけ欲しい」って、ずっと見たこともありました。
常陸 やっぱ釜石の外に出た人は、自分の知ってる場所が写つてるかもしれないっていう期待を持ってくるんですよ。たとえば、撮影地って曖昧だったりするんですが、嬉石出身の人にとっては、そこが嬉石町なのか隣の松原なのか重要なんですよね。写真展のパネルを見て、「これは嬉石ですよ。松原じゃないですよ。キャプションの撮影地について細かく質問されることもありました。怒ってるわけじゃなくて、すごく確かめたいって感じで。

最初は、普通にばあつて見ていて、気づいたら一枚の写真の前でずっと止まってるんですよ。人が写っている写真だと、まじまじ見て泣いたりする人もいるんですけど、そういう写真でもないし、どうしたのかなと思つてちよつと目を合わせにいったら、スイッチが入った様子で「あ、う」って話かけられたんです。そのことがあつてから、状況説明だけじゃなくて、撮影地も見人にとってはすごく大事な情報なんだなって。

川原 ここの出身じゃない人たちは、松原・嬉石地区つくつてて言うんだよね。でも地元の人にしてみればね。

常陸 ほかに「ここにわたしの実家が写つてね」と自分から説明



2011年9月25日〈大槌町上町〉

Photo by Ikue Hitotsukabuto



2011年8月〈釜石市両石町〉

Photo by Kenichi Kikuchi

を始める人がいて、この写真がなければそういう話をするともなかったであろう人が語ることにつながるっていうのは、何か果たしている役割があるんじゃないかと思えましたね。

川原 Facebookで毎月11日に写真を上げると、必ず100人、多いと200人以上の人からのいいね！があるから、まだまだ気にかけてもらってるんだなと思う。だから、2018年の3月11日には、お世話になった人への報告も兼ねて、何かつくって一区切りつけたいんですよね。

一枚の写真

——どんな写真があるのか、思い出

深いものについて教えてもらってもいいですか？

一兜 わたしは大槌出身なのですが、大槌は「一年のはじまりが祭り」っていうぐらい9月の祭りが盛ん。町中をフルマラソンより歩く祭りがあるんですが、震災の年は神社の周りしか歩けなかったんです。被災した人ばかりだし、家族を亡くした人ばかりだから。それでも、いろいろあったけどみんなやろうと。神輿を担いでいる氏子の半分はみんな家族を亡くした人たちで、亡くなった人たちにも見せようと一生懸命担いで。本当にいろいろな人が来て、とてもよかった。

こっちは被災した港で賢さんが撮った漁師さんの写真です。しか

も話してたら「なんだ、お母さんと同級生じゃん！」っていうのがわかって、こうやって笑いながら写ってくれたそう。一生懸命漁の道具を直して、せつなかったけどおもしろかったって言っていました。

川原 2011年の11月に東京で写真展をしたときに、賢ちゃん何人かで行ってこの写真の説明をしたんだけど、そしたら本人泣くわ、見てる人泣くわでみんな大変だったみたい。「号泣号泣でもう大変よ」って言ってたね。

一兜 これは（P.28）防潮堤が建って、旧国道45号線が真ん中にあるんだけど、新しいまちが防波堤の向こう側にできていくのがわかる写真です。左側は海岸に通じる橋で、被災したときのまま。ここは何て言う

か、いまと昔とこれからを全部感じられて、ぐっとくる場所ですね。

川原 道路がなくなるからもうここには来られないねっていう話をしていたけど、まだかろうじて行けるよね。

一兜 橋がどうなっていくのかわからないから、下のものもとの道路を歩けるのもういましかないっていう感じ。高い壁に覆われて、その上に新しいまちができていくと思うと、ちよっと何か寂しいようなよかったような、何とも言えない気持ちになります。

川原 でも、防潮堤を抜けて、浜に行ったら海のほうを見るとスカッとします。

一兜 そうそう、全然変わってないからほっとする。吉里吉里や浪板海

岸は、必ず高校のときにみんなチャリで泳ぎに行ったんだよね。

常陸 わたしはもともと釜石出身ですがずっと外に出ていて、震災のときも長野にいて、ちよっと長野から釜石に帰ろうと移動していた途中で震災が起きたんです。それでようやく東京に出ただけで陸路も空路も駄目で、新幹線で大阪へ行って伊丹から花巻に飛んで帰って来ました。それが3月19日から20日のこと。実家は被災しなかったんですが、どうなってるのか気になって出掛けて行って、何かを撮ろうと思って撮ったっていうよりは、ちよっとそのときに買ったばかりのカメラを持っていて、なんだか撮らなきゃいけないような気がしてちよっと遠慮しながら撮ったんで

す。そのあと2013年の8月にリアスに入って復興カメラのことを知って、そういえばわたしも写真を撮ったなと思って見せたら、「じゃあ、ここがいまどうなっているか定点観測しよう」って言うてくれて。わたしはちよっと震災直後から2年間海外に出ていたので、まちが変わっていく様子を見てなくて、帰って来たら綺麗になってた。だから、こういう写真を見て、前はこうだったなって思い出したり、こういうふうに変わってきたんだっていうのを知ったりしてるんです。

一兜 昔はこの写真(P.31)の場所には桜の木がこうぶわっとあったんですけど。だんだんなくなっちゃってます。

常陸 別にお花見するスペースも



2016年2月5日〈大槌町吉里吉里〉

Photo by Ikue Hitotsukabuto



1



2



3



4

1. 2011年10月3日
2. 2014年12月17日
3. 2015年7月16日
4. 2016年1月22日
〈釜石市嬉石町〉

Photo by
1. Satsuki Furukawa
2.3.4. Naoko Hitachi

わたしらのすべては、
ここからはじまったと思う。

災3年後くらいでした。

ないし、あまり目立たないんですけど、すごく綺麗な桜が咲くところだったんですね。津波もある程度かぶっていたはずだけど、毎年ちゃんと咲いてた。でもどんどん嵩上げをして道路の切り替えが進んでもともとあった道路が嵩上げで地面の下になってっちゃうのが、仕方ないけど、ちょっとなんとも言えない感じがあつて。

川原 もうこの場所から撮れない？

常陸 嵩が変わった感じはあるけど、まだ大丈夫ですね。

川原 わたしは、震災当日にセミナーを開催していたのですが、ここに来てくれた先生がたまたま撮ってくれた『旧釜石保育園』の避難写真（P.32）です。これを見たのは、震

一兜 何かの話であのときあの先生たちが釜石にいたんだよねっていう話をして、あの人たちだったから絶対写真を撮ってるんじゃないかと思って、川原さんに連絡を取ってもらったんです。

川原 そうしたら「あるよ」ってこの写真が送られてきた。わたしの嫁さんや床屋のおばさんが写っていて、よくよく見ると園の先生たちの服装がすごく寒そうなんです。3月だっていうのに普通のジャンパーしか着ていない人もいて、す

ぐに帰るつもりだったんじゃないかって。子供には気を使って上着は着せてるんですけど、バジャマのまんまの子もいてちょっと慌てた感じがあたり、たぶん子供たちのものだと思うんだけど、靴を袋に入れて持っていたりとか。このあと津波がきたことを知ってるから、よくこんな写真を撮ってたなって。わたしらのすべては、ここからはじまったなと思う。

——ここからはじまったというのは、どういう感じなんですか？

川原 やっぱり3月11日の震災がなければ、誰とも知り合わなかったから。たぶん普通に平穏な生活をしてたはずで、いろんな人といろんなものをなくしたけど、いまはいろんなものも得たと思うような時期になっている。

ここからとにかくはじまったっていうのは、この写真を見たとき最初の印象です。ここからこういう記録や復興支援の活動もはじまったんだなって。

——もし写真に写っている人たちにこの写真を見てもらうことができたなら、何をきいてみたいですか？

川原 このときどう思っていたか

ということですね。単純に、何で上着を着てなかったのって。すぐ帰れると思ってたんじゃないかっていうのは、わたしの想像だから。

一兜 そういえば、わたしも上着着て逃げてなかったな。

川原 俺は着てたぞ。

一兜 すぐ職場に帰るつもりだったなと思います。この通りはこんな感じだったとか。全部そうですけど、この一枚からいろんな人のいろんな話を思い出しますね。これを撮ったのは新潟のNPOの人で、セミナーに来てなければ被災もしてないし、一番手前の子たちはもう成長してこのあいだ小学校に入学したし、すごい一枚だなと思う。

川原 でも、この写真を園の先生方に見せたら、そのときのことをいい

ほうに思い出してくればいいんですけど、悪いほうに思い出しちゃったらと思うと、それがちょっと不安ですね。だからなかなか言いづらい。

一兜 あれから若い新しい先生も入って来たから、(この写真を使えば)これからまたこういうことが起きたときにこうするといいんじゃないとか、そんな話も出てくるんじゃないかなっていう思いもありますね。

川原 この一枚だけで、20人ぐらいの先生がいるもんね。その一人ひとりにきくだけでもすごい物語があるんだろうな。



みんなの家かだって(岩手県釜石市)にて
2017年8月31日

途中の風景 松本篤

震災からの復興の過程を住民みずから記録する活動に、2年前から関わっている。岩手県釜石市・大槌町での「記録に残す」試みは、筆者が別の場所で並行して取り組んでいるいくつかの試みと響き合っている。いまこの風景は、いつかどこかの風景とつながっている。それぞれの“あの日”のあとを追う試みの、そのあとを追う。



1. 2013年の秋、兵庫県西脇市に暮らす祖父が寝たきりになった。祖父を見舞いに大阪から帰省しては、祖父と同居する祖母に昔の話を聞いて記録に残していた。幼少時に川の対岸から見えた掘って建て小屋の自宅。戦争中の学徒動員。祖父との馴れ初め。私の母を産んだこと。母が私を産んだこと。ただ、祖母の話は、毎回同じ場面で中断し、そして再び最初に戻り、同じ語りをなぞり始める。またか。音飛びするレコードのように、祖母は規則正しく壊れる。

1年後、祖父が亡くなった。翌年の初盆、実家で祖母の話を聞いていた。その時だけは祖母の語りは繰り返されず、これまで聞いたこともないエピソードを教えて

くれた。実は祖父と出会う前に、文通していた意中の男性がいたらしい。はじめて聞く話にその場にいた両親は面食らい、私も不意をつかれて言葉を失った。そんな話を聞いたのは、後にも先にもあの日だけだった。

祖父が死んで“たが”が外れ、長い間心の奥にしまっておいたことが無意識に顔れてしまったのではないか。しばらくしてふとそう思えてきて、実家に電話をかけた。交互に電話口に立った両親は、口を揃えて言った。そんなことあったっけ。父も母も一緒になって祖母の話を聞いていたのに、当日の出来事はまったく憶えていなかった。啞然としてICレコーダーを聞き直すと、電池が切れて肝心の部分が録音できていなかった。こんなことが本当に起こるのか。間もなく祖母は体調を崩し、祖父のあとを追うようにその秋に死んだ。

2. 祖母が亡くなった2015年11月、東京の吉祥寺で川端康成の『十六歳の日記』を読み直していた。翌年に開催される展覧会の準備のためだった。その日記は、早くに両親を亡くした川端が、唯一の肉親だった寝たきりの祖父の最期を写したものだ。川端少年は「日記が100枚になれば祖父は助かる」という思いから原稿用紙100枚を用意し、盲目の祖父の臨終直前の様子を凄然と切りとっている。

この日記の面白さの1つに、出版された経緯の複雑さが挙げられる。川端が執筆したのは数え年で16歳の時。その10年後、川端が27歳の時に親戚の蔵に眠っていた原稿を偶然発見し、本文への補足やあとがきを加えて上梓した(1925年)。あとがきには、「私がこの日記を発見した時に、最も不思議に感じたのは、ここに書かれた日々のやうな生活を、私が微塵も記憶してゐないといふことだった。これらの日々は何処へ行つたのだ。どこへ消えたのだ。私は人間が過去の中へ失つて行くものに就いて考へた」とある。

話には続きがある。後年、日記の続きの断片が新たに発見され、川端が全集を編纂する際にその部分が本文に追記されたのだ(1948年)。おまけに「あとがき」のあとに、あとがきの内容を補強する「あとがき二」も収録された(1959年)。あの日の日記に、時を隔ててあとがきが重ねられ、さらに時を経てさらなる日記とあとがきがそれぞれに重ねられた。川端はあとがき二に、27歳の自分が「これらの日々は何処に行つたのだ」とあとがきに記した事実に触れながら、いまもって「過去に経験したが記憶してゐないという不思議は、五十歳の現在も私には不思議」だと書いている。

3. 祖父が亡くなる数ヶ月前の2014年8月、岐阜県大垣市の図書館で、「40年前の『慰問文集』を再発行」という見出しの新聞記事に目が留まった(毎日新聞岐阜版／1979年8月14日掲載)。慰問文とは、戦時下の前線で戦う兵士を鼓舞・慰労するために内地の人間が書いた手紙の総称である。日中戦争が始まって2年後の1939(昭和14)年6月、岐阜県の旧伊深尋常小学校の児童が、中国で戦う伊深

着く。6歳の誕生日以来、3度目の訪問だった。「家の跡形も何にもなかったんですが、仕事用の1メートル四方くらいの金庫が、半分くらい溶けた状態で残っていました。金庫を開けた途端に中に入っていた紙幣が燃えながら空に舞っていきました。〈略〉火が収まってから中を見たら、銅貨が溶けているような形に固まっています。ああ、うさぎさんだって喜んじったんですよ、とっさに」。あの日のあとを追うことで、文字に残らなかった声が再生されていく。

5. 祖父が亡くなった1年後、祖母が亡くなる1ヶ月前の2015年10月、岩手県の大槌町の「城山」にいた。町全体とその先に広がる海が一望できる、地元の人に親しまれている小高い山だ。『復興カメラ』のメンバーに連れて来てもらった。復興カメラとは、大槌町と隣接する釜石市の復興の様子を、住民みずからの目とおして記録していく試みだ。定点観測にも取り組んでいて、城山からの眺めも定期的に記録されており、その変遷がわかる。震災から7年が経とうとしている。いまでも変わり続けている風景があれば、まったく変化していない風景もある。いずれにしても、風景を失うことが、風景の不在を埋めようとするもうひとつの風景を創り出している。

2016年9月、釜石市でこんなことを聞いた。筆者が別の取り組みで、東京の井の頭自然文化園で飼育されていた象の“はな子”の写真を広く募集していた頃だ。「釜石には有名な鉄鋼の会社があるでしょ。昔から鉄が採れた場所だから。あそこの会社の保養施設が、井の頭の近くの三鷹にあったんです。だから、こころ辺の地元の従業員は、まとまった休みがもらえると家族と三鷹に行って、近くの動物園にも行っていたと思います。津波で流された持ち主不明の写真アルバムが、役場に保管されているんです。たぶんその中に、はな子と一緒に撮った記念写真もあるんじゃないかな」。

2017年の夏、釜石市内の写真館を訪ねていた。話を聞いている1時間の間に、店主は3つの仕事をひとつずつ片付けていた。1つ目は遺影。誰かが亡くなったのだろう。2つ目は赤ちゃんの記念写真。2人目なんです。アルバムを受け取りに店の中に入って来た父親が笑った。3つ目は工事現場の写真。できてる？ 作業服を着た人が、現像仕立ての盛り土の記録写真を持ち帰っていった。あの日が訪れるその前も、その後も、ファインダーを覗き続けてきたまちの“写真屋さん”。いま、彼らの眼に映っているのは、どんな人、どんな風景なのか。

記録を残すという営みの記録は、誰が残すのか。現在、釜石を起点として、まちの写真館に焦点を当てた取り組みを準備している。“あの日”のあとを追う試みの、あとを追う。その道のりは、いつしか「記録が生まれる場所」へと遡る経路となっていた。ここに記したのは、「記録が生まれる場所」に向かう途上に見た、いくつかの風景。

出身の“兵隊さん”に慰問文を送った。その慰問文集が40年ぶりに再発行されたのだ。

当時、尋常小学校4年生だった男子児童の慰問文の一部を紹介する。「〈略〉支那の方は如何ですか。蚕も終り麦刈りもすんで田植の準備中です。〈略〉今に伊深一面の青田となりませう。兵隊さん支那の子供は戦争の時はどこにかくれていますか。支那の子供は気の毒なことでせう。〈略〉僕は兎を二匹飼ってゐますがだんだん腹が大きくなったやうですから子を産むでせう。生まれたらたくさん飼って兵隊さんのために毛皮を送ります。僕は日本の為に働いて下さる兵隊さんのことを思つて一生懸命に勉強します。兵隊さんお体を大切にしてください」。この文章を含め30人の児童の慰問文、及び、教職員一同の兵隊への激励や村の近況報告が収録されていた。

地元に眠る戦争の資料を、失われる前に残そう。昭和54年、『伊深親子文庫』を立ち上げた主婦たちが住民に呼びかけると、前述の文集が提供された。ある伊深出身の兵士が、中国から一時帰省する際に文集を持ち帰ったのだ。兵士はそのあと、再び別の戦地に赴き、帰らぬ人となった。中国に送った文集だけが故郷に残った。主婦たちはその一字一句を3ヶ月がかりで鉄筆でなぞり、文集刊行から40年目に再発行した。「平成」が幕を閉じる2019年、その再発行からさらに40年の時が経つことになる。

4. 祖母が死んだ翌月の2016年12月、東京都江東区にて東京大空襲の体験者に会った。1945年3月10日の空襲当日は、奇しくも彼女の6歳の誕生日だった。長い沈黙を経た1971（昭和46）年、32歳となった彼女は26年前の体験をはじめて綴ることを決心する。その手記は『東京大空襲・戦災誌 第1巻』に「誕生日のその日に」として収録された。高度経済成長によって変貌したまち並みに、彼女は焼け野原の風景を重ね見た。それから間もなく、語ることの困難が再び彼女を襲う。2度目の沈黙がおよそ30年続いたあと、いま、彼女は語り部として言葉を紡ぎ始めている。

東京大空襲・戦災資料センターが保管していた彼女の手書き原稿を45年ぶりに自身に再読してもらいながら、沈黙の意味を探った。空襲後に岐阜県の中津川市に疎開した話。「〈略〉東京で空襲があったことは中津川まで伝わってないので、誰も知らないんです。先生さへも。〈略〉だから『空襲で大変だったでしょ、どうだった』と聞いてくる人もいなかったし、私から言うこともしなかったし、言うこともできなかった。〈略〉小学1年の春から入学した学校では、東京で大きな空襲があったことは私しか知らなかった。それがすごくつらいことでもあったし、救いにもなった」。

話を聞いたあと、記憶を頼りに当時の自宅周辺を地図に描いてもらい、あの夜の自宅からの避難の足取りを一緒に歩いた。「あの日はとてつもなく寒かった。3.11の時も、そんな感じだったのかもしれない……。当時住んでいた自宅の跡に

屋根裏ハイツ『とおくはちかい』

2017年6月29日-7月3日 せんだい演劇工房 10-BOX box-1 (宮城県仙台市)

2017年7月7日-7月9日 ST スポット (神奈川県横浜市)

作・演出 | 中村大地 出演 | 村岡佳奈、牧田夏姫

「きく」ときに わたしたちに起きるふるまい

Aの暮らす「この街」には、どうやら少し前に災害があったらしい。そこにBが訪ねてくる。久しぶりに会ったふたりは、リビングでお茶を飲みながらなんてことのない会話を。そして10年後、またふたりは同じ部屋で出会う。

この作品は、災害から半年後と10年後という時間を隔てた会話によって、ある出来事に関する「当事者と非当事者の忘れ方とその速度の違い」を描いている。明るさのなかに言い淀みと沈黙があり、ときおり机の上のラジ

オからは男性の声で『チェルノブイリの祈りー未来の物語』の一節が流れてくる。ただし、ソビエトといった固有名や原発といった言葉は伏せられていた。時はただ淡々と流れる。ふたりの話し声は、大きくもなく、小さくもなく、ふつうだ。しかし、舞台上の声をきくには、観客は前に身をかがめて耳をそばだてないといけない。静かな会話に向き合うわたしたちの身体は、いつしかふたりの「違い」をそのふるまいのなかに見ることになる。

屋根裏ハイツ |

2013年、中村大地 (P61へ) が演出を務める演劇カンパニーとして仙台を拠点に設立。少数のメンバーで話し合い、演劇に対して常に疑いのまなざしを向けながら試行と実験を繰り返し、人が生き抜くために必要な「役立つ演劇」を創出することを目的としている。最終的には家を建てたい。

あー、でもなんか、すごいその場面は覚えてるけどさ、そのシーンだけ、あとは覚えてないんだよね。や、そのシーンだけっていうかもっとほんとに場面場面、断片断片、がこう…あって、つながりが全然ないっていうか、そういう感じなんだよな。

これは私に起きたことじゃない、ひとごとなんだわと。私自身も泣き、食べ物や寝る場所をさがし、息子を抱きしめて落ちつかせようとしているのに、心のなかではいつも感じていたんです。私は観客なんだと。考えていたんじゃない。

(スペトラーナ・アレクシエービッチ著、松本妙子訳
『チェルノブイリの祈り 未来の物語』岩波現代文庫、2011年)



Photo by Takashi Iwabuchi

ラジオ下神白

—あのときあのまちの音楽からいまここへ—

第1集収録日 | 2017年2月27日 下神白団地集会所〈福島県いわき市〉

第2集収録日 | 2017年2月28日、7月3日 下神白団地各個人宅〈福島県いわき市〉

誰かの思い出の曲が、また誰かの記憶へ

「あのときあのまちの音楽からいまここへ」というフレーズで、ラジオの話にはじまり、地域のテーマパーク『常磐ハワイアンセンター』の思い出に花が咲き、いまの気持ちへ。エピソードと楽曲のあいだには、古いテレビCMが挟まれ、地域でカフェをひらいたマスターへの取材など「お知らせコーナー」もある。

福島県いわき市、下神白団地。この県営の復興公営住宅に暮らす方々をゲストに、個人の大切な記憶を、当時の馴染み深い音楽を通じて語ってもらう。パーソナリティは、文化活動家・アーティストのアサダワタル（P.61）さんだ。ラジオ番組風に編集された音源CDはアサダさんと「ラジオ下神白」をともに運営するメンバーの手によって一戸一戸手渡しで配布されている。

下神白団地では、富岡町、大熊町、浪江町、双葉町から避難してきた約2000世帯が、地域ごと、各棟に分かれて「一時的に」暮らしている。被災状況、住まい、賠償の違いなど、さまざまな隔たりを抱えながら日々を送っていたが、2017年に入って帰宅困難地域が一部解除され、もとのまちに戻る人や、別の復興公営住宅に入る人、震災前に住んでいた家のインフラの故障で団地と二拠点生活をする人など状況はより複雑になってきている。

ラジオではリクエストも募集している。あるリクエスト曲が、たまたま別の方にとっても思い出の曲だったことも。いまでは朝晩かかさず聴いてくれているという。思わぬエピソードが零れ落ちる。

一人ひとりの声を通して、同じ土地や違う場所に暮らす人々が出会う。誰かの思い出の曲が、また別の誰かの記憶を運んでくる。

「誰のせいだ」というとその「せいだ」ってことを言うこと自体が、わたし胸が痛くなるの。だからそうじゃなくて、もういいとこだけ仕舞い込んで、そして自分でこころを今度健康にしていかなきゃなんねえなっていうように、わたし考えるようになったの。

（第1集『常磐ハワイアンセンターの思い出など』14. 振り返り／～これからのこと）



主催 | いわき市、東京都、アーツカウンシル東京（公益財団法人東京都歴史文化財団）、特定非営利活動法人Wunderground

大風呂敷のこと

中崎透（美術家）



Photo by
HOKOI Takashi

以前 2011年8月15日に福島市で開催された『フェスティバルFUKUSHIMA!』を機に始まった『福島大風呂敷』についての経緯をブログに書いていた。2011年の夏くらいまでのことだったので、今回はそれからのことを、とは言っても6年以上経っているので概略的になってしまいかもしれないが、最近まで起きていたことを書いていきたい。

個人的なことだけでなく、2011年は水戸、福島、仙台、東京あたりを行ったり来たりな生活、制作が続いていた。そのなかでフェスティバルが終わり、秋が深まる頃、急速に日常に戻る感覚が各地であった。もちろん被害の大きかった沿岸部や原発由来も含め避難生活が続く被災者の方々と地域

や職種によって日常とはほど遠い状況であったがその一方で、あくまで自身の肌感覚ではあるが、夏くらいまで続いた非常事態な空気がサーッと普段に戻っていく感じがした。ある種、我に返るというか。とにかくやろう、から各地のそれぞれの問題に冷静に向き合ってそれぞれ丁寧にやっていこう、みたいな静かな変化。勢いと一緒にやれていたことが、それぞれの地域や状況にちゃんと向き合っていくとやるべきこともバラバラでそんなに一緒にやれなかったり、目指していた場所は近いはずなのに真逆のアプローチをすることもあったり、「分断」という言葉をよく耳にするようになったのもその頃だった気がする。フェスティバル以後もプロジェクト

トFUKUSHIMA!のメンバーのなかでも議論は続いた。震災直後の1週間、1カ月ごとのジェットコースターのように状況が変化した状況とも違う、じわじわとした捻れるような変化、そんななかでのやりとりは濃密で活発であった。

2年目のフェスティバルを考えるときに出てきた結論としては、大きな中心的なフェスではなく、12日間というコア期間を設けて、世界中で賛同する大小さまざまなフェス、イベントが100以上開催される、という形態だった。『Flags Across Borders』と題し、大風呂敷を解体し、1000枚を超える色も大きさもバラバラな旗につくり直して、各地に送る。バラバラなままバラバラに旗を掲げての

フェス、考え方や立場、状況も違うままにお互いを尊重してともにいられる社会、そんなイメージを出発点としていた。

少し戻るかもしれないが、フェスの前後のプロジェクトFUKUSHIMA！における大風呂敷の立ち位置みたいなものに、ちょっと変化があったかもしれない。もともと関わる人たちが音楽の分野が多かったり、大風呂敷の企画自体のスタートも遅かったこともあり、最初はプロジェクト全体からすると僕自身もオマケくらいの位置と認識して進めていた。

余談かもしれないが、震災の直後、たくさんのお祭りが身体ひとつ、楽器ひとつで何かしらのアクションを起こすなか、美術の分野の持つスピー

ドの遅さみたいなものにヤキモキした気持ちを多くの美術家が抱いたんじゃないだろうか。僕もその一人だったわけだが、大風呂敷の広がる光景を見たとき、もしくはさらに時間が経ち会場の写真をいろんな機会に目にするたびに、遅いメディアだからこの残り方や必要性みたいなことにあらためて気づき、役割分担というか、まあまあ、焦らずじっくりやっていかみみたいな気分になった。

そうそう、オマケ気分がフェスが終わってみたらプロジェクトを象徴する重要なピースのひとつになっていたなと思いつきながら、一緒に大風呂敷を担当していたアサノコウタくんの携わる、建築という分野も一般的には美術よりさらに一回りスピードの

遅いメディアだなあと思ったりしつつ、あらためて多くの分野が混ぜこぜになってできあがったプロジェクトなんだと再認識した。

2013年はミュージシャンの遠藤ミチロウさんが盆踊りはどうだろうかと発案したところから急速に進展して、複数の櫓を囲んだ生演奏によるオリジナル楽曲を中心とした盆踊りフェスティバルになる。それまで変化する状況で試行錯誤が続いたが本番の終わったあと、「うん、これで良かった」というちょっとした確信めいたことをたぶんそれぞれに感じたのだろう。それ以降いまのところ2017年までの夏のフェスティバルは、福島駅から徒歩圏内の「街なか広場」を会場に盆踊りを開催している。

当初から、参加者が当事者になるというのは目指すべきひとつのテーマだったように思っていて、特に2012年はそのための工夫をいろいろ試みていたものの、なかなかしつくりきていなかった。音楽に例えるとステージがあってミュージシャンがいると観客はどうしても受け手になってしまふ。「盆踊りの場合、演奏していても誰もこっちを見ていなくて楽しそうにみんな踊ってるんだよ」と嬉しそうに話す大友さんの言葉が印象に残っているが、古典的でありながら文字通り観客が主役になってしまふ形式であった。

この年からプロジェクトFUKUSHIMA！は『あいちトリエンナーレ』をきっかけに県外の各所に呼ばれ

る機会が増える。森美術館での展示会への参加、2014年は札幌、多治見、東京でフェスティバルが開催され、フジロックにも参加した。

福島県内での新聞では各地の放射線量を始め日々細かな情報が更新されていた。一方で全国紙になるとショッキングなニュースが稀に取り上げられるくらいで、福島の内と外ではだいぶ現実とイメージのズレが大きくなっている状況があり、県外への企画の参加はそういった状況への応答としても機能するかもしれないと積極的に動いていた。

2012年から2013年の時期、大風呂敷の県外での使用や展示に関して何度か、放射能を持ち込むな、といった声を耳にした。もちろんそうい

う声があるのも当然で、事前に専門家による大風呂敷の線量の測定も行っていった。ちなみに2011年の会場の線量はおよそ東京の4、5倍くらいで、1日野外に敷いていたので東京の野外に1週間程度置いてあったもの、と想像してもらおうといいかもしれない。さらにそれを洗浄したものなので、数字はびっくりするくらいでなかった。ここで問題なのは、数字とか科学のことではなく、一度怖いと思ったことは「怖い」という人間の感情の問題であって、知識や科学のことと感情との折り合わなさというか、噛み合わなさというか、そういった難しさを実感した。

直接口に出されなくても苦情が出る可能性に配慮する企画者の気持ち

もとてもよくわかる。そのような流れのなかで福島から大風呂敷を持っていくのではなく、現地で布を集めその土地独自の大風呂敷を制作するという選択が自然となされた。モノ自体ではなく、そのプロセスを持ち込んだことは正解だったのかもしれない。各地域での大風呂敷の制作は2011年の福島のような交流や多くの人の関わりしるを生み、2017年までに名古屋、猪苗代、札幌、多治見、東京、豊田などでも制作された。「大風呂敷サミット」と題した全国から大風呂敷制作に関わった人たちが集まるイベントも開催され、不思議なネットワークが形成されている。

もう一点、2013年の森美術館での展覧会『六本木クロッシング』では、

その年の愛知で制作された大風呂敷を展示に使用した。2011年、福島で会場の養生のために制作されたオリジナルの大風呂敷ではなく、別な場所、特に放射線防護とは縁もない装飾のための大風呂敷、ある意味では素人のつくったただのPATCHワークの布でしかないものが美術館に置かれる様子を見て、実際の機能としてではなく、仕組みの持つ概念や象徴性を担保として、大風呂敷が芸術作品としても成立しているのかもしれないと考えたりした。

東京での国際演劇祭『フェスティバルトーキョー(F/T)』では2014年から3年続けて池袋西口公園で盆踊りを開催し、札幌でも『札幌国際芸術祭(SIAF) 2014』

をきっかけに『さっぽろ八月祭』という名前で毎年継続されることになった。2017年のSIAFでは大友さんがゲストディレクターになったこともあり主要プロジェクトのひとつとして大風呂敷が取り上げられ、クロージングイベントとなったモエレ沼公園での2011年の福島を大きく上回る1万平方メートルに及ぶ大風呂敷は圧巻であった。そして、そのほとんどの制作過程の運営を2014年以降に関わった札幌のメンバーを中心に進められたということの意義は大きい。

今回のようにあらためて震災について書いたり話したりする機会が最近増えていて、5年10年とかの節目ではないのになぜだろうと考えたり

する。

一昨年くらいだろうか、「この先も大風呂敷がいろんな場所が続いていて、何でこんなPATCHワークの布を敷いているのか誰も知らなくて、よくよく調べてみたら福島由来だった、なんてことが将来あったらおもしろいね」なんて話していた。肯定的な意味で大風呂敷が自分たちの手から離れていくのを感じていたからかもしれないし、そもそも大風呂敷とは、と経緯から毎回話すのにはお互い少し手間に感じるほどの時間が経ったというのもあったかもしれない。

と思っていたところ、この2年くらいまた世間的に急速に2011年の震災が忘却というか遠くに感じるこ

す機会を設けるようにしている。

駆け足で最近までの大風呂敷の展開について書いてきたが、僕自身の関わりのことを少し。

各地で現地制作やコーディネートなどで足を運ぶ機会は多い。その都度、福島について尋ねられるわけだが茨城の水戸を拠点にする僕がそのことについて話すことはいまでも戸惑うことは多い。そんなとき福島の当事者ではないが、あくまでプロジェクトFUKUSHIMA!の一参加メンバーとして、大風呂敷のプロジェクトを進めてきた当事者としてというのを前提に話すようにしている。プロジェクトを通して出会った福島に住む友人たちから見聞きた状況として話したりすることもあるが、案外水

戸に住む人としての自分の震災後の話になることもある。

最初の2回のフェスの時はそれぞれ1ヵ月くらい福島市に滞在して準備をしたりしていたが、盆踊りになってからはほかの仕事もあり、数日から1週間弱の滞在になっている。

と言いつつ、お盆の8月15日に地元を不在にする夏がもう7回を過ぎた。毎年、夏になると足を運び、顔が見える人たちと祭りの準備をして、踊って、ビールを飲む。いろいろあったりするけど「元気にしてた?今年も会えたね」なんて何でもなし話とバカ話がほとんどで、いまでもそんな感じで福島の夏を送っていたりする。

福島大風呂敷、

制作日記 2011

中崎透

どうやって、大風呂敷ははじまったのだろうか？ 震災直後にはじまったこのプロジェクトについて、2011年9月28日から2012年3月24日のあいだにASTTのサイト*で書かれていたレポートを再録します。

書きそびれていた本番当日の記事は、今回書き下ろしです。

* 初出は国立国会図書館インターネット収集保存事業(WARP) 内の旧ASTTウェブサイトにて閲覧可。
<http://warp.da.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/10205361/asttr.jp>

プロローグ

3月11日の地震があったとき、僕はたまたま水戸芸術館（以下、水戸芸）にいた。不安ながらも、見知った顔がちらほらあったのがありがたかった。何の話だっけ、そうそう、『福島大風呂敷』についていくつかに分けて書いていこうと思う。そもそも福島大風呂敷の母体である『プロジェクトFUKUSHIMA!』を手伝うことになったのは、主催者の一人、音楽家の大友良英さんとの縁であり、水戸芸で1月まで開催されていた展覧会『大友良英／アンサンブルズ2010ー共振ー』にどっぷり関わったことによるところが大きい。

3月26日だったかな、震災により中止となった水戸芸での展覧会『クワイエット・アテンションズ』の出品作家であるSachiko Mさんの作品撤収に合わせて、大友さんも一緒に水戸にやって来た。この時期、客人なんてのはなかなかいなかったこともあり、キワマリ荘で鍋をすることにした。ふたりにとつても久しぶりに訪れる水戸はよい機会であつたようだが、水戸の辺りでは電車も動いてないし、ガソリンも手に入らない、場所によってはようやくライフラインが復旧してきたといったタイミングで、こんなにまともに集まって、普通に酒を呑む機会はたぶんそれれ久しぶりで、ネット上では無事を確認しつつもやっと顔が見れた、なんてことが多々ある場となった。普通にこうやって集まって、鍋をつついてビール片手にくだらない話をする。そんな日常が、こんなにありがたいうことをあらためて思い知った。

4月4日、吉祥寺の喫茶店で大友さんとのんびり話す。常磐線も動くようになり、震災以降初めて水戸を離れた。確かその直前に大友さんがミュージシャンの遠藤ミチロウさんと会って、「福島でフェスをやらないか」という誘いを受けたことや、大友さんが両親の住む福島市に近いうちに行こうと思ってるなんて話を聞いたりした。地震のこと、原発のこと、デモのこと、メディアのこと、などなど。それぞれのことは白黒が簡単につくようなことではなく、むしろ強引に白

にできないか？」という話だった気がする。とんちみたいな話だ。1万人が持ち寄った布をたった2時間で設置すること自体がまず無理だし、そんな安直に作品になるくらいなら美術家は苦労しない。なんてことを思いながら、なんなく聞き流すことにする。

東京駅で集まって、大友さん、マネージメントの野田茂則さん、プロジェクトスタッフでもあるNHKのディレクターの山岸清之進さんの4人で、新幹線で福島市へ向かう。車内で大友さんと話し合う。ものの5分くらいで、つい思いついてしまった。

「プロジェクトFUKUSHIMA! って大風呂敷広げちゃったようなもんですよ。実際に大風呂敷を広げちゃうってどうですか？」

プロジェクトそのものを大風呂敷になぞらえて、多くの布を集めて縫い合わせ、会場で巨大な布を、現実の大風呂敷として多くの人の手で広げる。そんなイメージが浮かんだ。演者と観客という関係だけでなく、もう少し違った関わりしろを持つ何かができるといいなとも思っていたので、なんだかストンと落ちたような気がした。反面、口が滑った気もした。しまったなあ。トントン拍子で話が転がる。会場の芝生がどんな広さかわからないまま、不安と期待が一気に増した状態で福島に辿り着く。

その日の夜は、福島事務局メンバーとの打ち合わせが深夜まで続く。隙間で話す些細な世間話のなかに、うまく言えないのだけど、水戸や仙台、東京ともまったく違う震災後の空気みたいなものを感じる。実際はわからないけど、印象として、無知で留まっている人はほとんどいない。みんなビクリするくらい多くのことを知っている。その上で現実と向き合い、それぞれが考え続けながら、ぎりぎりの判断を続けていく。そんなことを思った。

市内に住む若い建築家のアサノコウタに初めて会ったのもこの日の深夜。「君も一緒に大風呂敷を広げないか?」深夜のセッションで無茶ぶりをして誘

黒つけることによって多くのことに対して思考停止になることって結構あるなあなんて話をしていたように思う。その足で3週間ほど関西から九州にかけて会いたい人を尋ねてまわり、ゴールデンウィークになる頃に仙台や石巻などの東北の地を訪れた。その辺りでは、あまりうまくは言えないけれど、いかに互いの状況がわかりあえないもんかということがわかったというか、そんななかでわからないままのことを余白としてどう受け入れながら互いに向き合うか、そんな感じのことを考えていた。

プロジェクトFUKUSHIMA! の最初の記者発表があつたのは、ゴールデンウィークの終わり頃。5月中旬に東京で自分の展覧会があつて、そこに大友さんをゲストに招いてトークイベントをした。福島のこと、プロジェクトFUKUSHIMA! のこと、すでにネット上で大友さんの話していることを目にする、耳にする機会はあつたけど、あらためて聞いてみたかったし、いろんな場所で何度話してもいい話だと思っていた。その日の打ち上げのときに、「2、3週間くらい福島にプロジェクトの手伝いに行きますよ」という話をしたと思う。なんとなくイメージしていたこととしては、音楽の分野のメンバーに多そうだったんで、美術の分野の人もあると幅が広がるかな、とか。作品を制作して展示する、というよりは福島に暮らし制作する人の何らかのサポートをするようなことができるかな、とか。外から来た人が一方的に何かをするというより、中の人と外の人が合わさって、内なる声が湧き上がってくるような、そんな様子をぼんやりと想像した。

芝生に布を敷く、から大風呂敷へ

7月初旬に福島市内へのリサーチに同行する。その数日前に電話があつた。「放射線を防ぐこともあって芝生に布を敷くというアイデアが放射線衛生学の専門家・木村真三先生から出てきていて、当日観客に風呂敷などの布を持ち寄ってもらい、2時間くらいでそれらを設置して、しかもそれらを何らかのアート作品



う。結構じっくり話す。建築畑の人とは一緒に仕事していて、アプローチ方法は違うけれど、考えていることの相性がいいことが多くて、彼にもやはりそんな印象を受けた。

数年前から地元福島に拠点を移して活動しているアサノくん、割と毎回大きいことを最初に口に出してしまわうらしく、僕らが大風呂敷の話の切り出す前に「よく大風呂敷を広げちゃうんですよ」と、自己紹介。ある意味、運命的な出会いだったのかもしれない。

翌日は会場となる四季の里をリサーチに行く。歩幅で大まかな測量をして、大まかな計算から1300mくらいの布の量を目標にしていけばそれなりになるんじゃないかと数字を弾き出す。それが大きな間違いであったことに気づくのは、まだまだ先の話である。

福島へ

水戸に戻ってからは、『福島大風呂敷』と題した呼びかけのテキストを仕上げ、大友さんと野田さんと揉みながら詰める。イメーjordロイグも制作して、WEBでも告知を開始する。「Twitter」での大友さんの告知もあり、多くの反響が返ってくる。はじめは、とりあえず布を送ってもらって福島で縫い合わせるということだけを考えていたのだけど、各地で布を集めて縫い合わせてくれるという声がぼつぼつと挙げてきて、そういった動きをどんどん各地で進めてもらうことにする。先が見えない動き出しただけに、心強く、本当にありがたかった。それと、「大風呂敷を広げる」というシンプルな言葉の的を得た感じと強さをあらためて感じる。

7月22日、福島に向かう。途中の数日は仕事で中抜けしたけど、基本的にそれから撤収の終わる8月17日までずっと滞在することになった。現地で足がなかったこともあり、水戸から50ccの原付を走らせた。みんな手弁当だけにお金もないのだ。滞在先は大友さんの実家。食事もしばしば大友さんのご両親のつくろ

の頃に、ようやく僕はミシンの使い方を教えてもらうことから始めることになる。大風呂敷を広げるまでの道のりは遙か遠い。

少しずつ集まってくる

7月、はもろもろの下地づくりをした。僕らがミシンすらろくに扱ったことがないこともそうだが、大風呂敷なんて誰もつくったことがないわけで、どのように進めていくか試行錯誤して、作戦を練り続けていた。そんななか、募集していた縫子ボランティアに応募してくれる方が少しずつ増えてきたり、日に日に全国のあちこちから布が届くようになってきた。既に縫い合わされた大きな一枚布が届いたのには、おおいに喜んだ。福島駅の近くでオーダーメイドのドレスをつくっている方の工房に、応募フォームを頼りに突然訪ねたりもした。縫子に申し込んでくれた福島に住む手芸の達人たち(?)は、それぞれにいろんな経験を持っているだけにみんなあだこつだ言いながら、巨大な風呂敷の広げ方について一緒に考えてくれた。少しずつ輪郭のようなものができていった。

7月末から数日福島を離れる。水戸芸での展覧会のオープニング、東京でのレクチャー、せんだいメディアテークでのワークショップなど。

震災のときは水戸芸にいた。美術館が再開するのに4ヵ月半かった。あのとき不安な表情をして多くの人が水戸芸の広場に集まっていた。

オープニングで現代美術家の大巻伸嗣さんの大量のシャボン玉を広場にあげるパフォーマンスがあったんだけど、同じ広場にたくさん集まった人が集まっていた、それぞれの楽しそうな表情が妙に時間の流れを感じさせた。適切な言葉がうまく思いつかないのだけど、福島、水戸、仙台、東京と

行ったり来たりしていて、震災以降の時間を経ての状況の変化というか、違いやズレのようなものが立体的に身体に入ってきてる感覚がある。具体的にこつ、という感じではないんだけど、確かにある違和感のようなもの、考えて動くための



いいご飯をいただきながらの日々となった。そういった持ち出しというか、手づくり具合がおもしろかったりもした。

福島へののんびりとした道中はよい機会となった。小さい頃から福島には何かにつけてよく訪れていて、その道のりは10数年ぶりではあるけど、通い慣れた道



だった。ふとした瞬間に身体が裏道を憶えていたり、ところどころの風景が記憶と重なったりしながら楽しむ。その記憶の場所は、以前クリストが壮大なアンブレラプロジェクトを行ったエリアともわりと近くて、いわゆる素敵な日本の里山風景が広がっているのだけど、河原でごろごろしたり、川で遊んだりするのを想像すると、一瞬躊躇する現状に複雑な気分になる。放射線衛生学者の木村さんに初めてお会いしたのも、福島市に着いた夜だったと思う。この人のお陰で大風呂敷という大変なことに巻き込まれてしまったわけだけど、なんだか気さくな方で構えずに、ずっと言葉が身体に入ってくるというか、覚悟ある気持ちよい姿勢の人だった。



木村さんとの対話のなかで、なんだか少し肩の力が抜けるのを感じた。それは別に何かに安心したわけでも、大丈夫ですよと言われるわけでもなく、無知が故にすべてに対して警戒し緊張していたことを、特に警戒すべきところやその有効な方法、逆にそこまで過剰に意識しなくてもよいポイントを専門家からきくことで、意識のメリハリというか、力の抜きどころのようなものをイメージできたからなのかなと思った。

とりあえずは作業場を整えるところから始める。大友さんの実家もともと工場だった物件で、しばらく使っていなかった部屋がそのままに大風呂敷工場に生まれ変わることとなる。

手始めに自分の母親が溜め込んでいた布を縫い始める。大友さんのお母さんの使い込んだミシンを使わせてもらって、調子が悪いとお父さんがメンテナン

大切なきっかけ。

8月4日、福島に戻る。大風呂敷スタジオはわかに活気づいてきている。僕が不在の間は、アサノくんが現場を回してくれていた。入れ違いで彼は仕事のために新潟へ向かった。そうなのだ、なんだかんだでふたりとも揃って大風呂敷の作業に本格突入したのは本番1週間くらい前だった。内緒である。

あと1週間になってきた

本番の1週間くらい前に作成したチラシに寄稿したテキストを載せておく。この文章は、基本的にしぼり時間が経ってからのふりかえりで書いているのだけど、当時のその渦中でのテキストは少しだけ空気が違っていたりもする。たぶん8月9日くらいに執筆。8月15日の告知のためのチラシなのに、なんでそんな時期に原稿書いているんだという疑問はつきないが、考えるな。

「真夏の福島に大風呂敷は広がるのか？」

当日がやってくるまで一体どうなるかなんてなかなかかわからないのはいつものことなんです。いまのところ毎日毎日ミシンの前でたくさんさんの人と布を縫っています。毎日毎日、冗談みたいに北は北海道、南は沖縄まで全国津々浦々から布が送られてきます。布の詰まった荷を開封すると、メッセージや思いの縫い合わせが目飛び込み、僕らが大風呂敷スタジオ一同で一喜一憂しています。スタジオの方もおかしいことになっていて、地元福島の主婦から、帰省中の学生さん、東京、仙台はじめ各地からやってくる人、さまざまな場所、世代がゆるやかに集まり、ちょっとした茶のみ話のほずなのに、震災や原発のことだったり、それぞれの状況や考えに互いに耳を傾け合うんだかとてもよい機会になっていきます。

フクシマから、向き合い、考え、話し、動き始める、そういう意味では、少しずつだ
けどどこですでに大風呂敷が広がり始めています。

8月15日の午前9時から、四季の里にて福島大風呂敷を広げます。足を運んでみ
ませんか？手を動かしてみませんか？目撃してみませんか？隣の人と話して
みませんか？くだらないダジャレのような話だけど、そこからホント
に広がってしまう大風呂敷があってもいいなと思っています。

福島大風呂敷ディレクター 中崎透(美術家)

このあたりの数日は、なんだかとてもおもしろい時間だった。本番の
2、3日前は、それはそれでおもしろかったんだけど、ワークシヨップ
に参加する人や、フェスの観覧のために前日入りした人まで、あちこち
から大勢の人が手伝いに来てくれていて、直前のばたばた感も混じり
合って、お互いの顔や名前を把握できないままに突っ走っていくよう
な状況だった。なので、そのちよつと前のこの時期は、休憩時間にもん
がり自己紹介したり、わりとお互いが何者なのかを認識できたり、作業
よりもちよつとしたことで話し込んでしまったり、そういう時間を内
包している時間がとても贅沢だった。しかも地元の人と外からやって
来た人の割合や、年齢層の散らばり具合が妙にいい感じで、その都度全
然違うそれぞれの背景みたいなものを互いに注意深く聞き合うような
場が自然とできていたように思う。

ちよつどその時期、本番1週間前にしてようやくというか、やっとと
いうか、僕とアサノくんがふたり揃って、現場に張り付きで大風呂敷スタジオが
稼働し始める。だいたい定まってきた作業工程としては、まず最小単位として、
2.5m×2.5mの布を大量生産して、順々につなぎ合わせて、5m×5mにす
る。そこから10m×10mをつくっていく。実際のところ、畳んだり保管したりす



ることを考えると、この屋内のスタジオで無理なく(結構無理している)制作で
きる最大サイズが10m×10mくらいだろうと落ち着いた。それを当日現地で鉄
製の杭を打ち込んでつなぎ合わせていく計画だ。

毎日10〜20人くらいが入れ替わり立ち代わりで作業が進む。直前の2、3日はた
ぶん40〜50人くらいは出入りしていたと思う。届いた布を、送り主の
ラベルを記録しつつ、サイズに応じて仕分けする人、バラバラのサイ
ズの布を2.5m×2.5mに組み合わせて仮止めする人、それを縫う
人、さらに5m×5mにつなぎ合わせて縫う人、畳む人、量を確認しな
がらでき上がった布を仕分けする人、ちよつといびつな工場の流れ作業
みたいな状態になっていた。

送られて来た布、縫い合わされた中風呂敷が届くなか、添えられた手
紙や、布に書き込まれたメッセージにスタッフ一同で一喜一憂しながら
作業が進む。

8月に入ると日に日に送られてくる布の量も増えてきて、毎日10箱を
越える段ボールがスタジオに届き、縫っても縫っても増えていく無限
地獄のような錯覚にしばしば陥ったりしたのも正直なところ。全国か
らの送り主のラベルは保管していたけれど、それぞれの場所に布を持
ち寄ってくれた人、一緒に縫い合わせてくれた人たちなど、いつしか
どれだけの人がそこに関わってくれたのかはまったく把握できなく
なる。文字通り、北は北海道から、南は沖縄まで、全国津々浦々から集
まってきた。

実質のスタッフが僕とアサノくんしかいなかったもので、人の受け入れ
から、チラシのデザインから、何から何まで。後半はコピーライター
の坂口千秋さんが加わってくれて本当にありがたかった。8月10日くらいから
猛烈にペースが上がる。



サイズのこと、コンセプトのこととか

7月に会場を下見に行ったとき、漠然とだけ歩幅で測ったりとしながら
1300mくらいをイメージするところから始めた。会場の芝生全面というよ
りは、とりあえずメインステージの客席エリアが一面の芝生になっていたの
で、あくまでそのエリアの大部分が覆えればなんとかなるだろう、といっ
た計画であった。

しかし、7月も終わろうとしている頃の深夜にミシン作業をしてみると、
大友さんが突然ビックリするようなことを言い出した。

「音楽解放区というたくさんの人たちが会場の至る所、思い思いの場所
で演奏する時間帯があるのだから、やっぱり公園の芝生の全部を覆わ
ないといけないんじゃないのか。」

「ええー……。」
思いついてしまった大友さんが厄介なのはなんだか知っている。試し
に図面に当てはめて見てみると、どうやら3000×4000mは必
要そうである。たださえ大風呂敷だったのが、本番2週間前にさらに
3倍ほどに広がったわけで、この日のことは「7月の悪夢」と呼ばれて
いる。

最初に公園管理事務所みたいなところで渡された図面があって、僕ら
はとりあえずそれを基にぼんやりとサイズ感をイメージしていた。ち
ゃんとした図面というよりは、便宜上の施設配置図といったようなもの
で面積とかはそこまで精密じゃないんだろうなあ、と薄々気づいて
いた。なので、8月に入ってからアサノくんが住宅地図をベースに図面を起こ
す作業を進めた。もろもろ作業が建て込んでいて後手に回ってはいたんだけど、
ある日、といつても8月10日は過ぎていて、残り3、4日くらいのタイミ
ングだったと思うんだけど、くそ暑い日の屋下がりアサノくんが僕に耳打ちした。



「大変なことになりました。さらに倍は必要そうです」
「ええー……。」
このまま順調にいけば4000mの大会に届くかもしれない、そんな希望が見
え始めた矢先のことだった。最初の図面が全然面積が参考にならなかった
ことと、素人が歩幅で測っても火傷するだけだぜってふたつのこと
を学習した。大収穫だ。正確な数字は出ないけど8000mあって
もどうやら足りなさそうだなということだったので、全部覆う、とい
うよりはやれるとこまでやってみる、という路線でいってみることに
する。ちなみにその後、この日のことは「8月の白屋夢」と呼ばれてい
る。

福島大風呂敷のコンセプト経緯について少し触れておく。

そもそも、会場の芝生をシートのようなもの覆ったかどうか、といっ
た提案をしたのは放射線衛生学者の木村さんである。少し聞きかじり
もあるので厳密ではないが、僕の捉えている内容として書いておく
と、大風呂敷で放射能を防ぐ、といった言い方をされていることも多
いが、実際ちよつと大文字すぎるなあと思っている。会場の線量を測
定した結果、1日だけであれば特に気にするような影響はないだろう
といった見解を木村さんはしていた。大風呂敷のない状態での話であ
る。芝生の上に敷かれた一枚の布は外部被曝の線量を下げるのには特
に効果はない。その上で、シートや布で芝生を覆う提案は、表面被曝
と、衣服や靴の裏に付着した放射性物質の拡散を防ぐことを目的とし
ていた。そこには主催者側からの観客に向けた念入りの配慮といった

側面も大きかったと思う。

その辺りで僕も加わり、その時点では、「シートで覆う」が「布や風呂敷を当日
の観客に持ってきてもらって覆う」となっていて、大友さんと話すなかで、プロ

ジェットFUKUSHIMA!の掲げた提案として、大風呂敷を広げちゃったよ
うなもんだねって話から、それになぞらえて実際に大風呂敷を広げたらど
うだろう、とダジャレのような意味性がくっついて実行に移すことになった。そ
して制作の過程で話し合うなかで、「拡散を防ぐ意志」という言葉が大友さんか
ら出てきた。

それはこのプロジェクト内の話だけではなく、流通網の発達した現代
の日本において今後福島ふるまいて、測定する、嘘をつかない、
公開する、そういったことを徹底することではいろいろなことが始ま
らないんじゃないか、というような意味合いのことだった。自分たち
で過剰に見えるくらいに拡散を防ぐ態度や意志を示すことの意義が
段々に大きくなっていった。当日フェスティバルに来た観客に向けて
というだけでなく、もっと象徴的な意味としての、拡散防止の意志を示
す表現としての大風呂敷へと展開していったように思う。そういった
経緯から僕個人としては、福島大風呂敷を、放射能を防ぐ実効性より
も、コンセプト的なアクションとして捉えている部分が大きいかも
しれない。ただ、頭でっかちなコンセプト云々とは別な部分で、びっく
りするくらい地味な手間のかかる作業の積み重ねで、ものすごく身体
的で、それでいて多くの人が主体的に関わるプロセスが自然発生して
いたことは重要な。それと、大風呂敷に限らず、このフェスティバル全
体のことでもあるけれど、この時期に福島に足を運ぶ、という行為自体
が既にひとつのアクションであったと思うし、あの会場で大風呂敷を
踏みしめた多くの人は、すでにただの観客ではなくなってしまうてい
うように感じた。

前夜

本番直前の数日は、毎日50人くらいが入れ替わりで作業していた。玄関先が布調
整スペース、工場部分がメインのミシン縫いスペース、外の駐車場は場目の金具

違えたり、互いにケタイも知らないからうまく連絡とれないし、むしろ誰がど
の車に乗っているのかも誰も把握していないから、ありとあらゆることが空回
りで可笑しかった。うん、ホントに可笑しかった。

それから夜が明けそうなくらいまで20人近くが作業をして、6、7人の戦士がほ
ぼ徹夜で最後の風呂敷まで畳み終える。本番を迎えず、朝方に東京や茨
城での仕事のために帰って行く人もいた。なんだったんだろうな。あ
んなだか不思議な時間だった。

大友さんはスイカが好きだ。その話は結構知られているようで、布と一
緒にスイカが次々と送られてきた。こんなにスイカを食べた夏はなか
ったから、たぶんスイカを食べるとこの夏を思い出したりするんだろ
う。1日に2回くらいの恒例のスイカタイム。たまに大友さんがギター
を弾き出したりする。そして、くだらない話をして、またミシンに向か
う。なんだか贅沢な時間だった。

プロジェクトFUKUSHIMA!が、多くの人がいまの現実と向き
合っていて、話して行動するためのちよとしたテーブルのよう
なものを目指しているのだとしたら、そこにはささやかながらにそれ
が実現するよう場ができてくつあるのかもなあと思った。

8月15日 大風呂敷を広げると

朝、30分ほどの仮眠というか休憩を挟んでトラックに大風呂敷の積み
込みが始まる。確かトラックには大学生とドキュメント撮影に入っ
ていた藤井光さんと僕との3人で乗っていて、突然、当日の朝に会場に向
かう場面で使いたいかちよと歌ってくれないかと藤井くんが振っ
てきたので、徹夜明けのテンションで大声で歌いながらトラックを運転する。も
ちろんそんなシーンは映画には1秒も出てこなかった。

会場には、前日のミーティングに参加した人たちも含めると200人近い人た
ちが大風呂敷を広げるために集まってきていた。ホッとした、ああ、なんとか



を打つ場所になり、近所の病院の駐車場に10m×10mの風呂敷を畳むために夜
な夜な通い詰め、ついには3階の生活場所も第2工場と名づけられミシンが5
台ほど持ち込まれた。正確な目標サイズがわかってから、死に物狂いでやった。
最終的には6000㎡を越えるところまでいった。進行状況を逐一見ていて、現
場の渦中にいた身からすると、ホントに奇跡のような話だった。少し
脇道に逸れるけど、今回は僕も含めみんなボランティアであった。義
務ではないし、すべてが埋まらなくても誰が怒るわけでもない、集ま
れるだけ集まって、縫えるだけ縫って、広げられるだけ広げる。それ以
上でも以下でもないが、実際のところはものすごくたくさんの意志や
行動の集積でできていて、それを紡いで定着させるというのは実は責
任重大で、読み切れない不測の状態をコントロールしながら数値を出
していく作業を僕は延々としていた。前日にアサノくんがようやく
仕上げた最終的な風呂敷の配列図は、いろんなものが組み込まれてい
て、なんだか美しかった。

最終日は普段の大風呂敷メンバーに加えて、大友さんのオーケストラ
の参加メンバーや詩人の和合亮一さんのワークショップ参加メンバ
ー、フェスティバルのために前日入りした人たちや事務局メンバーな
ど、たくさんの方が駆けつけてなんだかお祭りみたいだった。夕方、当
日設営のためのミーティングをしたら、50人近くが集まった。6チー
ムに分かれ、それぞれの段取りを共有していく。当日参加する人た
ちは、このメンバーの指示のもと大風呂敷を広げていく。この時点で、最
低限当日の朝にこの人数の人がいてくれるんだということが判明し
て、少しだけ不安がとれる。

その夜、全然終わらなそうなのに、翌日の団結を深める意味も込めつつ、思い立
って30人くらいで温泉に行ってみることにした。バラバラに寄せ集められてや
って来ているだけあって、ひどすぎるチームワークの珍道中で、本番が思いや
られる。いや、ホントにひどかった。車数台で出かけて、地元じゃないだけに道を問

広げ切ることができる、と心底ホッとした。プロジェクトFUKUSHIMA!
のことや大風呂敷をつくることになった経緯を少し話した後、青空の下で大風
呂敷を広げた。あつという間に広がり、芝生一面の会場が冗談みたいな風景に変
わった。

くたつと座り込んで、そのあとの記憶がボヤッとしている。広げたま
んなで興奮して話していたのを覚えている。布を送ってくれた人が、
自分の送った布を見つめるところに居合わせてニヤニヤした。広げる
という行為だけじゃなくて、ここまで来てこの大風呂敷の上を歩く
という行為自体が思ってた以上に能動的なアクションになってるこ
とに驚いた。

途中でゲリラ豪雨が来た。雷に混じってエンケンさんの叫び声のよう
な歌が響き渡っていた。夕方、ステージでのライブをごろんと横にな
って半分寝落ちしながら聞いていた。濡れた大風呂敷をどうやって撤
収するんだろうかとぼんやり心配しながら身体が全然動かなかった。
撤収は結局翌日になった。翌日も会場に来てくれるという手がたくさ
ん挙がったからだ。気持ち良い天気で、みるみるうちに乾いて、これま
たあつという間にもとの芝生の風景に戻っていた。

この8月15日のことは、映画になったり、本になったり、テレビ番組に
なったりしていて、あとになってふりかえる機会があつたりもするけ
ど、未だに思い返してもどんな日だったのかっていうのがボヤッとし
ている。僕自身も大風呂敷のプロジェクト以外のことがろくに覚えて
なかったのと、関わる人が多すぎて顔も見えてない人もたくさんい
て、全体像なんて全然掴めていなかった。たぶん全部が見えてる人なんて誰もい
なくて、1万人いたら1万通りのあの日があつて、大風呂敷の柄や色も大きさも
バラバラな布が縫い合わさってかたちづくられた風景は、なんだかそんな様子
をうまく表していたなあと思う。



わたしの東北の風景

いま、東北で何を見ているのか、
今号に参加してくださった方々にまなごしをわけていただきます。
震災後、東北でどんな経験をしましたか？

是恒さくらさん 広島県呉市生まれ、山形県山形市在住

宮城県の牡鹿半島の先端の町「鮎川浜」をはじめて訪れたのは震災から4年後の2015年。それから2年、津波で曲がったガードレールがまだなまなましい。90歳近い鯨の解体士のツトムさん、東京から移住して地元鹿の霊島・金華山で巫女だった女性。訪れるたび知り合っている山形県上山市の廃校

になった小学校の「郷土資料室」には、行く宛てのない郷土資料が山積み。忘れられていく時代の伝え手だ。山形県大石田町の陶芸家、ブルーノ・ピフルさんの「薪窯」では地場の粘土に新たな生命が吹き込まれていく。それぞれの場所が変わっていくものと変わらないもの、両方あることに豊かさが見える。



鮎川浜（宮城県石巻市）



薪窯（山形県大石田町）

郷土資料室（山形県上山市）



松本篤さん 兵庫県西脇市生まれ、大阪府大阪市在住

ああ、ここからの眺めだったのか。黒い波が町を呑み込んでいく。動画投稿サイトで見たことのあった風景のいまが、目の前にあった。岩手県は大槌町に、町中が一望できる地点がある。「城山」と呼ばれる小高い場所である。はじめてそこに登ったのは、震災から4年後の2015年。復興のプロセスを記録する試み『復興カメラ』のメンバーに連れられて行った。県

外から訪問者がやってくる、必ずといってよいほどここからの眺めをはじめに見せるらしい。約20ヶ所ある定点観測ポイントのひとつにもなっているようだ。復興カメラは、あの日を起点に同じ眺めを何度も重ねていく。風景を失うことが、風景を創ることを生んでいる。



城山（岩手県大槌町）



中村大地さん 東京都足立区生まれ、宮城県仙台市在住

最近、自宅から歩いて海に行った。新寺通りをずっと真っ直ぐ進むと、東部道路を通過して海岸公園までたどり着くことができる。2時間くらいの道だった。車だと20分以上だろうか。震災から6年以上が経ったいま、まちなかで震災を体感するのは難しいけど、一本道を行けば同じ市内の、いまも津波の痕跡が色濃く残る場所にアクセスできる。出来事との距離を考える。

もう一枚は岩手県西和賀村にて、1ヵ月滞在して演劇の制作合宿をしたときの写真。静かな温泉宿でのゆったりとした、密なやりとりは本当に豊かだった。このときほどではないけれど、仙台の僕の周辺には少し延伸した、考えごとをして人と話をするのにちょうどいい時間が流れている気がする（のんびりのおかげで慌てることも多いけれど）。



蒲生地区の海岸公園近く（宮城県仙台市）



新寺通り交差点（宮城県仙台市）

ライブハウス・鳳鳴館（岩手県西和賀村）



下神白団地（福島県いわき市）

アサダワタルさん 大阪府堺市生まれ、東京都小金井市在住

下神白団地に住まう御年94歳の女性Tさんご自宅。戦前の女学校時代に共に過ごした2人の学友との忘れられない記憶。3人仲良く映ったモノクロの写真。BGMには淡谷のり子の「別れのブルース」や霧島昇「旅の夜風」。訪問するたびに必ず出てくる牛乳プリンと甘酒の組み合わせ。ラジオ下神白のCDを聴いてくれている。最初は「機械がなくて聴けないから」と断られたが、ラジ

カセこと貸してよかった。いまでは毎日欠かさず。そのなかに別棟に住むKさんの思い出の曲、藤山一郎の「青い山脈」も入っている。それも聴かれてまた別の記憶を思い出される。帰り際にはかならず、キューピー人形に着せられた手編みの衣装を披露。「どれが好きなのもらったかって。お子さん生まれたのね、おめでと。遠慮なくさあさあ」。お元気で、また行きます。

中崎透さん

茨城県水戸市生まれ 同市在住

1 今年の夏に石巻での展覧会に参加した。空がよく見える場所だったので、星空をイメージした作品を制作した。震災の日の水戸の夜、停電で灯りのないなか、煙草を吸おうと外に出たらやたらと星がきれいだな、悔しかった。展覧会場となった電気屋のオーナーのおっちゃんはその日の夜の話をしてくれた。また別の日のことだったか、見上げた空の星がやたらきれいだった話を聞いていて、空がつながっていることを思い出した。

2 一 震災前から有志の手により毎年福島市で開催されていた音楽イベント『FOR座REST』。震災を受けて中止を余儀なくされていたが2015年に開催。いろんな人たちのさまざまなことの詰まった2日間だった。3 一 数年前から通行できるようになった、いわきより先の常磐自動車道。一部線量が高めの場所があるがたいして影響があるわけでもない、と頭で思っけていても運転しながらギョウツとした気持ちになる。春先思いがけず浪江の山火事の時期に通りかかり、テレビやネットで見たニュースと現実が結びつきハッとした。



宮城県石巻市



常磐自動車道
〈福島県浪江町付近〉



FOR座REST
〈福島県福島市〉

表紙の是恒さくらさんの作品と出会ったのは、2017年8月のこと。岩手県盛岡市にあるCg at galleryの「ART BOOK『FINAL TOHOKU』」で展示されていた「ありふれたくじらジャーナル」・「牡鹿半島」・「太地浦」と題された小冊子と刺繍作品だった。かつて捕鯨を通じて交流のあったふたつの土地の人々にそれぞれの土地の鯨の話を訊ね、いまはもう出会うことのない人々の「記憶の風景」が穏やかに編み紡がれていた。刺繍や語りの隙間から、他者の記憶にふれることの尊さと畏れのような手触りを思い出す。

2017年11月、自宅に一時帰宅するたびに、家の中の放射線量を測って書きとめていた、という手書きのメモを目にした。長屋の床の間に展示されていたその「放射線量計測記録」の冒頭には、赤字ではっきりと「事故から6ヵ月」とある。定規で丁寧に引かれた線、茶の間、台所、こたつの中……折りの記録のような数値を前に、しばらくその場を離れられなかった。それは、東日本大震災・東京電力福島第一原子力発電所事故によって生まれた課題を考える場をつくる「はま・なか・あいづ文化連携プロジェクト」が、市民芸術祭「ベップ・アート・マンス2017」（大分県別府市）で行った展示のことだった。このあと京都にも巡回するという。東北の記憶と記録の実践は、静かに熱を帯びながら各地へと派生していく。

「下町芸術祭は、阪神淡路大震災から20年を迎えた2015年に始動した芸術祭です」。その一文に惹かれて、2017年11月末に兵庫県神戸市長田区を訪れた。事務局を務めるNPO法人DZOMBIXの劇場の出入り口の眺めが忘れられない。上演がない時は、そこに机を広げて事務所スペースができる。劇場の扉はいつも開かれ、スタッフやダンサー、ふらりとまちの人もやってくる。ほとんどのスタッフは、いま、このまちに暮らしているらしい。生活と表現とまちが緩やかにつながり、内と外の境界が曖昧になりながらも異なる者が共に居る風景がそこにはあった。震災関連の催しは、20年を節目に大きく減ったそう。下町芸術祭は、「これからこそ自分たちの手で活動を起こそう」という地元住民の声から始まっていた。

参加者一覧

是恒さくら「アーティスト」

1986年生まれ。アラスカ州立大学フェアバンクス校で先住民芸術と絵画を学んだ後、2015年に山形県に移住。2017年、東北芸術工科大学大学院地域デザイン研究領域修了。「記憶のなかに留められた思いに、かたちをもたらし、綴った物語に刺繍を添えて、本を編んでいる。」

仲田絵美「写真家」

1988年茨城県生まれ。2011年写真ワークショップ 松本美枝子の「キワマリ荘の写真部」を修了したのち、作品の発表をはじめ。第6回写真「1-WALL」審査員奨励賞、第7回同展グランプリ受賞。2015年 写真集『よすが』（赤タ舎）刊行。現在、茨城県水戸市を拠点に活動している。

鈴木諒一「写真家」

1988年静岡県静岡市生まれ。2011年多摩美術大学芸術学科卒、2013年東京藝術大学大学院美術研究科先端芸術表現専攻修了。主な個展は「観光」(EMON PHOTO GALLERY/広尾、2013年)、「リバーフィールド」(artish/神楽坂、2013年)、グループ展は「Guinées no e no e」(ギランイス/ポルトガル、2012年)がある。2011年、第5回東野芳明記念・芸術学科優秀卒業論文賞、第1回EMON PHOTO GALLERY W グランプリ受賞。現在、東京在住。

松本篤

「reem」NPO法人記録と表現とメディアのための組織「メンバー」1981年生まれ。2005年よりA H A「Archive for Human Activities」/人類の営みのためのアーカイブ」を開始。8ミリフィルムやアマチュア写真といった「市井の人びとによる記録」の価値に着目し、アーキビストなしのアーカイブづくりを模索している。近年は、井

の頭自然文化園にいた象の（はな子）の記録と記憶を集める取り組み「はな子のいる風景」を実施。また、東京大学大学院学際情報学府博士課程に在籍し「コミュニティ・アーカイブの研究を行っている。」

中村大地「作家・演出家」

1991年生まれ。自身が主宰する「屋根裏ハイツ」という劇団で演出を務め、これまで試演会も含めて5つの作品を発表。その演出作品は起承転結のある大きな虚構の物語世界を描くことよりも、舞台上で起こる行為、現象そのものにフォーカスしている。外部劇団での演出経験も多数。東北で一番おもしろい学生演劇を決める「とうほく学生演劇祭」の事務局、ARCT、一般社団法人NOOK所属。

アサダワタル

「文化活動家／アーティスト」1979年生まれ。言葉や音楽を手がかりに、各地で生活コミュニケーションに根ざした文化実践と執筆

中崎透「美術家」

1976年生まれ。武蔵野美術大学大学院造形研究科博士後期課程満期単位取得退学。看板をモチーフとした作品をはじめ、パフォーマンス、映像、インスタレーションなど形式を特定せずに展開している。展覧会多数。2006年より「Nadegata Instant Party」を結成し、ユニットとしても活動。2007年より水戸市内にて遊戯室（中崎透十遠藤水城）を設立し、運営に携わる。2011年より「プロジェクトFUKUSHIMA」に参加、主に美術部門のディレクションを担当。

編集後記

佐藤李青

東北の「記録の生態系」は、いま、どうなっているのだろうか。

これは明確な観測対象として世の中に存在するものではないし、震災以降に東北の地で生まれているように感じていた文化的な営みを、ひとつの集まりとして捉えるために仮に名づけてみたものだった。この「仮に」という言葉で現在に点を打つ方法は、大事な心構えとなった。

編集会議では、何度も「わからない」という台詞が飛び出した。それこそが変化するいまを捉えているのだと確認しながら、各地を歩き、人と出会い、その声に耳を傾けた。本号は、そうして採集した風景の記録でもある。

最後に、もう少しだけ、本号を契機に出会った風景を、ここに記しておきたい。

掲載原稿も、ほぼ出揃った2017年12月23日、せんだいメディアテーク（以下、メディアテーク）で開催された草アーカイブ会議2「コミュニケーション・アーカイブってなに？」^{*1}に参加した。

ていた。展覧会に併せて制作された作品集も同様だった。「工藤夏海というひとりの女性が、日々の生活という土の上に蒔いた小さな種の集まり」として編まれた本書は、地元の写真館で撮影した6歳のランドセルを背負った工藤の写真からはじまる。

これらの実践には同じようなまなざしがあるように思えた。同じ土地で暮らすからこそ地続きに見えてくる「私」の表現を「公」の場に掬い上げる。そのまなざしは個々のものとしての「作品」に焦点をあてるのではなく、複層的な個々人の文化的な営みに向けられている。そうしたまなざしを他者と共有するための「現れ」をつくるために、「アート」という領域で培われてきた技術が用いられていた。

そして、それらの実践を担う人々を思い浮かべたとき、甲斐さんが目指す先として語っていた大阪の過去の風景は、もしかしたら、こういう感じだったのではないだろうか、とふと思った。

主催者として甲斐賢治さんが冒頭に挨拶をし、松本篤さんがスピーカーとして登壇していた。タイトルにあった草アーカイブII「コミュニケーション・アーカイブ」とは「プロ野球」と「草野球」を例に「誰もが関わることでできる、ごく日常的な文化活動としてのアーカイブ」と説明された。メディアテークのアーカイブに対する態度を象徴する言葉だった。会場には一般の参加者に交じって、アーティストを始め、震災以降メディアテークの活動に関わった、さまざまな人が訪れていた。登壇者の議論に耳を傾けるだけではなく、その場で互いに何かを確かめるように集^くっているようにも見えた。

フォーラムの前にギャラリーターンアラウンドの工藤夏海個展『世の中グラデーション』^{*2}に足を運んだ。ドローイング、スケッチ、版画、立体、切り紙、ZINE、人形劇の人形など雑多ともいえるほどの多様な表現は、ひとつの場を紹介することで、それらが工藤夏海という個人のもとして地続きの営みであることを浮かび上げさせ

生態系とは、歩けるくらいの土地の範囲のなかで同時代の問題意識から生まれる実践の連鎖で立ち上がってくる視点なのかもしれない。仙台に限らず、本号に掲載した東北での実践は互いにまなざしを共鳴させながら、複数の人々の手が重なり合うようにして生まれていた。

その根底には「この土地で何ができるか」という問いがあった。それは2011年の震災の経験が育んだものだろう。だが、同時に見えてきたのは、いまの東北の風景をかたちづくる実践は「震災後の東北」に留まらない広がりをもつということだった。いつかの経験はいまを支え、どこかに届く可能性がある。

わたしたちには、東北に軸足を置きながら、ほかの場所と時間をつなぐメディア（媒介）としての役割が求められているように感じている。8年目、9年目、その先の10年目という節目に目を向けながら、いまも変化し続ける東北の地の観測を続けていきたいと思う。

*1 フォーラムは2日間開催1日目（12月23日）のテーマは「提示・表現」――「痕跡とアクチュアリティ」鑑山 通信所、終戦・ホーム。スピーカーは小岩勉（写真家、坂田太郎（サイト・イン・レジデンス）、瀬尾夏美（画家・作家）、松本篤モデレーターとして桂菜史（東京藝術大学大学院映像研究科教授）が登壇した。

*2 工藤夏海個展『世の中グラデーション』は2017年12月20日～2018年1月14日に開催された。作品集『工藤夏海 世の中グラデーション』は制作・発行「世の中グラデーション」実行委員会（安部朝美、長内綾子、関本欣哉、高橋創一）。

是恒さくら 《この岸、かの岸》

素材：糸、布 （300mm×400mm） 2017年

是恒さくらさんが初めて牡鹿半島を訪れたのは、2015年春。東北芸術工科大学の復興支援の学生団体に同行した。「まだまだ復興が進んでいない」という声もあるなか、是恒さんは半島の野生の豊かさが印象に残ったという。木々が生い茂る森には鹿が住み、脅威を振るう海も平時は、さまざまな海産物を与えてくれる。震災を経てもなお同じ土地で暮らしを紡いでいこうとする人たちとも出会った。

今回の表紙は、ずっと昔から東北の沿岸部のあちこちで、人の暮らしが海とひと続きにあった風景を描いている。大きく広がる漁網は、海から糧を得る道具。網地島の精霊流しで見た提灯と、紀伊半島できいた「船のかたちの精霊流し」のイメージも入っている。

「海は遠く離れた土地と土地を結びつけ、この世を去った祖霊や家族が彼方にいる。海とは " いくつか還っていく場所 " でもある」と語る。



東北の風景をきく

FIELD RECORDING

vol.01

特集 記録の生態系にふれる

Art Support Tohoku-Tokyo

編集長

佐藤李青（アーツカウンシル東京）

編集

川村庸子

嘉原妙（アーツカウンシル東京）

デザイン

内田あみか

印刷

アトミ印刷

監修

森司（アーツカウンシル東京）

発行

2018年2月2日 第1刷発行

アーツカウンシル東京

（公益財団法人東京都歴史文化財団）

〒102-0073

東京都千代田区九段北4丁目1-28

九段ファーストプレイス8階

TEL 03-6256-8435 FAX 03-6256-8829

<https://www.artscouncil-tokyo.jp>

©アーツカウンシル東京

Art Support Tohoku-Tokyo

Art Support Tohoku-Tokyo（ASTT）は、「東京緊急対策2011」の一環として開始した、東京都がアーツカウンシル東京（公益財団法人東京都歴史文化財団）と共催し、東日本大震災の被災地域（岩手県、宮城県、福島県）のコミュニティに対して、現地の団体と協働してアートプログラムを実施する事業です。

都内で展開する「東京アートポイント計画」の手法を用いて、現地のアートNPO等の団体やコーディネーターと連携し、地域の多様な文化環境の復興を支援。被災地域のコミュニティを再興するため、さまざまな分野の人々との交流プロセスを重視したアートプログラムや、その実施を支える仕組みづくりを行っています。

<http://asttr.jp>

